『血族』

巽 ヒロヲ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

－序章－

少女は、草むらに仰向けに倒れ、ただ、空を見ていた。
夏の盛り。むっとするような草の匂いが、鼻孔に届く。
それは、どこか血の匂いに似ているようにも感じられた。
少女の、笑えばとても愛らしく見えるであろう幼げな顔は、ひどく空ろで、いかなる表情も浮かべていない。
白い清楚なブラウスのボタンは飛び、チェック柄のスカートは大きくめくりあげられたまま、しわくちゃになっている。
そして、やはり純白のショーツが、乱暴に引きずり下ろされた時のまま、右の足首にまとわりついていた。
白い内腿に付着した破瓜の血は、すでに、乾いている。
無残というも愚かしい、陵辱の痕跡……。

他に人影のない草むらに、打ち捨てられた人形のように、少女は横たわっている。
（どっか……行っちゃったんだ……あの人……）
（あたしを、おいて……）
暮れていく空を、雲が流れていくのを黒い瞳に写しながら、少女は思う。
（男の、人って……）
（好きでなくても、女を抱くことが、できるんだ……）
痛みが、あまりに大きいためか、心が、それを未だ受容しきれていない。
（そうなんだ……）
（なんだか……ずるい……な……）
今は、呪うでもなく、恨むでもなく、ただ、限りない寂しさに似た何かが、胸のうちを虚ろにしていくのを感じる……。

少女は、涙の涸れ果てたような瞳で、ただ、空を見ていた。
夕焼けに染まる、朱色の空――
（あたし……多分……この色を、ずっと忘れない……）
少女――水島詩織は、ぼんやりと、そんなことを考えていた。

そして、物語は、この半年後に、再び動き始める。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

－第一章－

　ＪＲのターミナル駅の近くの、大規模な工事現場。頭上には、電車の通る高架が走っている。
　時は深夜。無論、現場作業員はすでに一人もいない。隣接する道路に、ごくごくたまにタクシーが通るのみである。
　その工事現場に、数人の男が立っていた。
　月明かりが、その男たちの影を地面に落としている。
　革製のジャケットとブラックジーンズをまとった、長身の若い男と、一目でそのスジの者と分かる数人の集団……。
「服を、脱ぎな」
　集団のうち、リーダーらしき中年の男が、言った。
　言いながら、まとったコートの内懐から、拳銃を取り出す。
　旧ソ連で設計された自動拳銃の、粗悪なコピー品である。しかし、その小さな殺人道具からは、本物のみが持ちうる迫力がかもし出されていた。
　若い男が、素直にジャケットを脱いだ。
「全部だ」
　拳銃で狙われながらそう言われ、若い男は、グレーのシャツも脱ぎ捨てた。
　服の上からは想像できなかった、意外と逞しい肉体が、外気にさらされる。
　が、その若い男は、寒そうなそぶり一つ見せない。
「なかなかいい覚悟だな。……それとも、まさか、まだ助かると思ってるんじゃねえだろうな？」
　拳銃を持った男が、口元を歪めながら、言う。
「言っておくが、これは脅しじゃねえ。服を脱がしたのは血で汚さないためだ。後始末に苦労しないようにな」
　相手の恐怖を煽るかのように、拳銃を持った男は、言う。
「もうすぐ、最終電車が上を通る。ちょうどこいつの音を聞こえなくするにはおあつらえ向きだ。お前は、その時、こいつで撃たれて死ぬんだよ」
　そう言って、拳銃を軽くゆする。
　そんな言葉を聞いて、若い男は、その秀麗な顔に――にっこりと微笑みを浮かべた。
「野郎――っ！」
　拳銃を持った男が激昂したとき、かすかに、最終電車のアナウンスが聞こえた。
　電車が動き出し、そして、頭上の高架を、轟々と音をたてて走っていく。
　その轟音に紛れ、数発の拳銃弾が、続けざまに発砲された。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

犬月飄次郎がその場所に着いたときには、冷たい空気は、生臭い血の匂いに満ちていた。
月は雲に隠れ、巨大な即席の塀に囲まれたその場所には、外灯の明かりすら届かない。
が、飄次郎の目は、剥き出しの地面に累々と転がる幾つもの死体を捕えていた。
いずれも、喉笛や顔面などに深い傷を負っている。恐らく一撃で絶命したのだろう。
死体のうち一人は、その手に、拳銃を握っていた。
「好き放題ちらかしやがって……」
飄次郎は、眉間にしわを寄せながら、ぽつりとつぶやいた。
身長一八〇はある長身に、黒いコートを袖を通さずにまとっている。通った鼻筋と一重の鋭い目が印象的なその顔には、しかし、人を寄せつけない冷たい雰囲気がある。
二十歳前後に見える若々しいその顔に対して、髪は、半白だ。それも、やや長めの髪の根元に向かって、次第に白くなっている。
「五人……六人か……この街は、人の命の値段が安いな」
そう、飄次郎がつぶやいたとき――
ゆらりと、死体のうち一つが、動いた。
いや、それは死体ではなかったのだ。
下に、ブラックジーンズのみをまとった、上半身剥き出しの、しなやかな影。
雲が流れ、工事現場を、さあっと蒼い月光が照らす。
満月――
「狗堂……」
飄次郎が、犬が唸るような声で、言う。
その影は、飄次郎と同じ血族につながる男、狗堂章だった。
年のころは、飄次郎よりわずかに上――二十代半ばほどだろうか。
その秀麗な顔は、どこか飄次郎に似ている。身長も、ほぼ同じくらいである。
二重の大きな目と、笑みをたたえた唇、そして、ゆるくウェーブした髪がかもし出す雰囲気は、一見、物柔らかだ。
しかし、観察力に優れた者なら、その顔を見つめているうちに、微妙な違和感を感じるだろう。
完璧に見える微笑みの中にある、かすかな歪み。
目が、少しも笑っていないのだ。
その目が、闇の中で、飄次郎の鋭い視線を受け止めている。
「よくここが分かったね、飄次郎」
狗堂が、ややかすれた声で、言う。
「狗堂、お前……」
「僕を連れ戻しに来たのかい？　それとも、長の命令で、掟破りの痴れ者を殺しに？」
「……村に戻るつもりは、ないのか？」
苦悩に満ちた声で、飄次郎が言う。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

「僕が自分から戻るのを期待しているのかい？　甘いなあ」
　そう言いながら、狗堂が、全身を緊張させた。
　血に濡れた胸板が、ぐうっと膨らむ。
　と、その傷口から、数発の拳銃弾が、筋肉に押し戻されて弾け飛んだ。
　銃弾は、そのまま放物線を描き、ころころと地面に転がる。
「飄次郎は、本当に甘いよ。まだ体に弾が残っているうちなら、僕を取り押さえることもできたかもしれないのに……」
「……」
「いくよ……！」
　狗堂が、地を蹴った。
「ちっ！」
　舌打ちして、飄次郎が、肩にかけただけのコートを、右手で狗堂に投げつけた。コートの下は、この寒空の下、薄手の黒いワイシャツ一枚だ。
　コートが、狗堂の体に半ば覆い被さる。
　と、そのコートを易々と貫いて、狗堂の貫手が、飄次郎の喉元に迫った。
「くあッ！」
　強烈な一撃を、飄次郎は、首を左に振ってかわした。
　狗堂の貫手が、飄次郎の右の頬を、深々と削ぐ。
　飄次郎の顔から、熱い血が溢れた。
「おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！」
　咆哮が、夜の闇を、貫いていた。

　遠くで、サイレンの音が響いている。
　ビルとビルの間の狭い路地に、奇怪な獣が、いた。
　いや、それを獣と言っていいものかどうか。
　直立した姿で、大きく肩で息をしながら、ビルの壁に背を預けている。
　そのプロポーションは、逞しい人間のように見えなくもない。
　が、その全身には、灰色の獣毛が生え、上体は大きく前かがみになっている。
　指先の爪は、長く伸び、そして鉤のように歪曲していた。
　そして、その顔――
　その顔は、けして人のそれではありえなかった。
　長い口吻に、はみ出た牙。短い毛に覆われた、三角形の耳。爛々と光る眼。
　狼の、顔だ。
　首から上が、完全に犬科の猛獣のようになった男が、東京の片隅で、息を整えている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

獣人とでも言うべきか。
その獣人の吐く息は、荒く、白い。
獣人がまとっているのは、黒いワイシャツの残骸と思われる布地の切れ端と、ずたずたに裂けたスラックスのみである。靴も、履いていない。
と、路地の入口に、気配がした。
ぴくん、とそれの耳が、動く。
「お兄ちゃん……？」
ささやくような声が、路地に響いた。
「ひょうじろーお兄ちゃん、そこにいるんでしょ？」
まだ幼い少女の声だ。その声の合間に、くんくんと鼻を鳴らすような音が聞こえる。
「だいじょぶ。ケーサツは、こっち来てないよ。あの工事現場は、たくさん死体が見つかったって、なんだか大騒ぎになってたけど」
「ＵＲＲＲＲＲＲ……」
少女の言葉に応えるその声は、きちんとした人間の声にならない。
「匂いをたどるのに、ちょっと手間取っちゃった……。着替え、持ってきたよ。気が利くでしょ」
そう言いながら、路地に、声の主が入ってくる。
オーバーオールにジャンパーをまとった、中学生くらいの少女が、獣人の前に現れた。野球帽をかぶり、髪は、その中に押しこんでいるらしい。眼鏡の奥で、利発そうな大きな眼が、くるくるとよく動いている。
「Ｆuuuuuu……」
獣人が、何か言いかける。
「あーあ、ボロボロじゃん。ずいぶんとハードだったんだねえ」
言いながら、少女は、恐れ気も無くその獣人――犬月飄次郎に近付いた。
少女の名は、犬月ラン。飄次郎の妹だ。漢字では「嵐」と書くのだが、彼女自身は、カタカナで通している。
ランは、肩にかけていたスポーツバッグを下ろし、中からタオルを取り出した。タオルは、あらかじめ近くの公園の水道で濡らして、固く絞ったものだ。
「狗堂さんには、会えたの？」
タオルで飄次郎の体を拭きながらランが訊くと、飄次郎が、その狼頭で肯いた。
「じゃあ、これは狗堂さんにやられたんだ……」
言いながら、ランは、飄次郎の胸元の傷を、優しくぬぐった。その傷は、しかし、ほとんど塞がっている。
「……もう、狗堂さんをかばうのは、やめたほうがいいよ。お兄ちゃん」
やや太めの眉をしかめながら、ランが言う。
「お兄ちゃんだって、分かってるでしょ。この傷……。狗堂さんは、お兄ちゃんを殺すつ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

もりなんだよ。あたし――見損なったよ」
　そのランの言葉に、飄次郎が、首を左右に振る。
「あたしの気持ちなら、もう決まってる――。狗堂さんのお嫁さんになんか、ならないよ。もともと、あんまりタイプじゃなかったし」
　再び、飄次郎は首を左右に振った。
「もう、ガンコ者！」
　そう言って、ランは、飄次郎のひざまずいた。
「男衆ってば、ホントにガンコで、ケンカばっかして……そのくせ、尻拭いはみーんな女衆にさせるんだから」
　そう言いながら、ぼろきれのようになったスラックスに、小さな手を伸ばす。
　飄次郎の長身が、わずかに身じろぎした。
「何よォ、初めてじゃあるまいし」
　ふっ、とランは、その幼い顔に似合わない、妖しい笑みを浮かべた。
「こんな満月の夜に、後先考えないで“変わっちゃう”から、こんなことになるんでしょ。ほら、いいから覚悟決めて」
　そう言いながら、もはやほとんど機能を果たさないようみ見えるファスナーを下ろす。すると、スラックスの残骸は、ぱさ、と地面に落ちてしまった。
　その下のトランクスも、ほとんど衣類としての形をとどめていない。
　ランは、慣れた手つきで、そのトランクスの間に、両手の指を差し入れた。
　半ば血液を充填させた、浅黒いペニスが、露わになる。
「んふ……すっごい匂い……」
　兄のその部分が放つ強烈な牡の臭気に、うっとりと目を細めながら、ランは、ちろ、と小さな舌で亀頭の先端を舐めた。
　そして、ちゅっ、ちゅっ、ちゅっ、と鈴口の辺りにキスを繰り返す。
　ランの小さな手の中で、飄次郎のペニスが、次第に硬度と容積を増していった。
　天を向いていく飄次郎のペニスの裏側に、ランが、ねっとりとピンク色の舌を這わせる。
　口内に唾液を溜め、それを塗りつけるようにシャフトに舌をからませるその姿は、娼婦顔負けの淫らさだ。
　羞恥と興奮に、その可愛らしい顔を染めながら、ランは、兄のペニスを唾液で濡らしていく。
　ますます硬く強張る男根に、愛しげに頬ずりしながら、ランは、その細い指で、飄次郎のペニスをぬるぬるとしごいた。
　逞しいペニスが、快感に、しきりにひくつく。
「あむ……」
　ランは、目を閉じて、ペニスの先端を咥え込んだ。
　そして、口内で、れろれろと舌を動かし、亀頭を刺激する。

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

「んふ……お口の中で、またおっきくなってきた……」
　嬉しそうにそう言うランの言葉通り、飄次郎のペニスは、妹の口内で、さらに大きさを増したようだ。
　その小さな口でフェラチオするには大きすぎるペニスを、ランは、喉奥まで飲みこんでいく。
　柔らかそうな唇が、静脈を浮かして節くれだったペニスをスライドする様が、無残なくらいにエロチックだ。
　ペニスの、３分の２ほどを口内に収めたところで、ランの動きが止まった。どうやら、そこが限界らしい。
「ん……んむ……ん……ふん……」
　媚びるような鼻声を漏らしながら、ランが、ゆっくりと頭を前後させた。
　生温かい口腔粘膜と、ひらひらと動く舌が、飄次郎のペニスを上下から刺激する。
　ちゅぶっ、ちゅぶっ、ちゅぶっ、という、唾液の弾ける水音が、淫猥に響く。
　ランは、右手をシャフトの根元に添え、左手で剛毛に覆われた陰嚢を優しく撫でるように揉みながら、ディープスロートを繰り返した。
　ランの可憐な唇を出入りするシャフトが、唾液にぬらぬらと濡れている。
　兄のペニスを口唇愛撫することに興奮しているのか、可愛らしく小鼻をふくらませながら、ランは、いよいよ熱心にフェラチオに没頭した。
　ふうン、ふうン、という鼻声が、ひどく艶めかしい。
　唾液が、ランの顎を伝い、地面に滴った。
「Guuuuu……」
　飄次郎が、喉の奥で、獣そのもののうめきを上げる。
　まるで、妹の舌と唇がもたらす快感に耐えているかのように歯を食いしばっている兄の人ならぬ顔を、上目遣いでちらりと見つめ、ランはますます激しく頭を動かした。
　硬い獣毛に覆われた飄次郎の腰に両手を当て、頭をねじるようにして、ペニス全体を口腔で刺激する。
　その口内では、唾液に濡れる舌がシャフトに絡みつき、雁首の部分をえぐるようにしてなぞっていた。
　飄次郎は、こみ上げる快感に、思わずランの頭を両手で押さえていた。その拍子に、野球帽が地面に落ちる。
　長い、腰にまで届きそうなストレートの黒髪が、はらり、とランの背中に広がった。
　その長い髪を激しく揺らしながら、ランが、最後の追い込みをかける。
「――！」
　飄次郎は、唸り声を噛み殺しながら、熱い精をランの口内に迸らせた。
　とても飲み込むことができないほどの大量の精液が、ランの小さな口から溢れる。
「んぶっ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　たまらず口を離すランの可愛らしい顔を、びしゃっ、びしゃっ、と勢いよく放たれ続けている白濁液が叩く。
　かけている眼鏡がずれてしまうほどの強烈な射精を顔に浴びながら、ランは、どこか恍惚とした顔を浮かべていた。
　がっくりと、飄次郎が、背中を背後のビルに預ける。
　と、その顔に変化が現れた。
　灰色の体毛がぞろぞろと抜け、顎が、次第に引っ込んでいく。
　曲がっていた背筋が伸び、耳や鼻の形も、元に戻っていった。
　べっ、と飄次郎は、その足元に血の塊のようなものを吐き出した。
「やだあ、汚いなあ」
　ランが、あわてて飛びのく。
「すまん……」
　そう言って、飄次郎は、口元をぬぐった。手の甲に、べっとりと血の跡がつく。
「いつ見ても、ホント、大変そうね。ま、顔の形が変わっちゃうんだから、血ぐらい吐くと思うんだけどさ」
　そう言いながら、ランは、新しいタオルで自分の顔を拭き始めた。
「あーあ、メガネべとべとお……。やだあ、髪に付いたのがとれないよお」
「すまん……」
　大騒ぎをしているランにもう一度謝ってから、飄次郎は、大きく伸びをした。
　ばきばきと威勢のいい音をたてて、全身の骨が鳴る。
　冬の朝日が、このビルの谷間を、ようやく照らし始めていた。

　その日の夕刻。首都圏にある、研究施設の一室。
「これは、君の仕業かね、狗堂くん」
　そう言って、白衣を着た壮年の男が、机の上に新聞を投げ出した。
　その一面に、駅近くの工事現場で、六人の暴力団構成員の死体が発見された事件についての記事が、大きく載っている。
「ええ」
　狗堂、と呼ばれた若い男が、涼しげな表情で肯く。
　そんな狗堂の顔を不快げな顔でにらみ、白衣の男は、突き出た腹をゆすりながら言った。
「一週間もどこに雲隠れしたのかと思ったら……。勝手な事をしてもらっては困る。今、君の存在が世間に知られるのは、私にとって最も避けねばならないことなのだ。それは、君だってそうだろう」
「それは、その通りなんですけどね」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　狗堂は、優美な仕草で、両手を広げた。
「しかし、なにぶん、東京に出たばかりの頃は、右も左も分かりませんでしたから。どうしても、心ならずも人様の恨みを買うことが多かったのですよ」
「怪しげなローンを踏み倒した挙句、取り立てに来た組員を次々と半殺しの目に合わせていれば、こうなるのは当たり前だ」
　白衣の男は、丸々とした指で、新聞をいらいらと叩いた。
「まさか、あんな法外な利子を請求されるとは思わなかったもので」
　くつくつと、狗堂が、人の神経を逆撫でするような笑い声をあげる。
「それだけじゃなかろう。この街でも何度も騒ぎを起こして……いつまでも揉み消すことができると思ったら大間違いだぞ」
「教授――」
　すっ、と狗堂が立ちあがった。
「僕は、教授のモルモットではありませんよ」
　そう言いながら、デスク越しに身を乗り出し、白衣の男に顔を寄せる。
「そ、それは……無論だ」
　目の前に迫る歪んだ笑みを前にして、教授と呼ばれたその男は、やや声を上ずらせる。
「そうですよね」
　狗堂は、その指先を男の首筋にあてがい、まるで女を愛撫するような手つきで、ゆっくりと撫でた。
　そして、伸びた爪を、じょじょに男のたるんだ顎に食い込ませていく。
「あなたは、犬神の血――僕の血族の秘密を手に入れたいのでしょう？」
　囁くように、狗堂が言う。
「そして、あなたの背後には、大きな勢力がある。どこかの国……おそらくは、合衆国あたりがスポンサーなのでしょうね。それも、国防関係のお役所が」
「き、君は……」
「僕だって、馬鹿ではないつもりです」
　すっ、と狗堂が身を引いた。男の顔には、じっとりと冷や汗が浮かんでいる。
「あなたは、ずいぶんと僕によくしてくれた。全てが金で解決できる世の中とはいえ、単なる学問的興味だけでできることではありますまい」
「……」
「あなたは――いや、あなたのスポンサーは、僕の血族を、軍事利用するおつもりなんでしょう？」
「……そうだ」
　観念したように、白衣の男が言う。
「今は、もう、大量破壊兵器の時代ではない。冷戦は終わり、核はその存在のみに価値の置かれる、使用不可能な兵器となった。これからは、カウンター・テロのための、より繊

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

細な運用のできる兵器の時代なのだ」
「そして、僕と同じような兵士を“生産”して、アラブ・ゲリラにでもけしかけるんですか？」
　狗堂は、来客用のソファーに腰を下ろしながら、続けた。
「まあ、悪い考えではないかもしれませんね。いささか、その発想はステロタイプのそしりを免れえませんがね」
　そして、またくつくつと笑い出す。
　が、可笑しそうに笑いながらも、狗堂の目は、やはり少しも笑っていなかった。

「いよお飄次郎ちゃん、相変わらず恐い顔してんなあ」
　明るい、と言うよりも軽薄な声でそんなことを言いながら、萌木緑郎は、すでに二人の座るボックス席についた。
　夕刻の、都内の真っ只中にある喫茶店である。営業回りらしいスーツの男や、学生らしい男女などで、店内は混み合っている。
「その代わり、ランちゃんはいつもどーり可愛いねえ」
「そりゃどーもありがとーございます」
　むすっとした顔で、飄次郎の隣に座るランが言う。
　優男、という表現がいちばんしっくりくるような顔に、何かに驚いたような丸い目。額に、ばさりと前髪がかかっている。年は、飄次郎より少し上だろうか。
　緑郎は、そんな顔にへらへらとした笑みを浮かべながら、ウェイトレスにアメリカンを注文した。
「とりあえず、先週の件では、礼を言っとく」
　飄次郎が、礼を言うにはいささか無愛想な顔で、そう言った。
「いいっていいって、たいしたネタじゃなかったからねー。でも、結局は逃げられたんだよねえ」
「そんな呑気な声で言わないでよ。あたしもお兄ちゃんも、真剣なんだからぁ」
　ランは、ぎろっ、と眼鏡の奥の目で緑郎の顔をにらんだ。
「ランちゃ～ん、そんな顔しちゃ、美人が台無しだよ」
「だからあ、そーいう態度をやめてって言ってるのお！」
　ランの剣幕に、緑郎は、ひょい、と首をすくめた。
「じゃ、早々に次のネタ、行っとこうかな」
「悪いな。そうしてくれ」
　さすがに苦笑いしながら、飄次郎が言う。
「でもねー、東京……っつーか、首都圏も含めての広範囲で、人一人追跡するのは、けっ

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

こう難儀なんよ。いかにオレが腕利きの情報屋さんでもね」
「だろうな。恩に着る」
「まあ、今回は、ターゲットが行く先々で騒ぎを起こしてくれてるんで、助かるって言えば助かるんだけど」
　そう言いながら、緑郎は、抱えていた封筒から、何枚かの書類のコピーを取り出した。
「それに、今回のネタは、自分で言うのもなんだけど、かなりイイよ。何しろ、相手さんのねぐらを突き止めたんだから」
「ねぐら……住んでいる場所か？」
「うん。どうやら、半年近く前から、ここに世話になってたみたいなんだな」
　そう言って、緑郎は、書類の内の一枚を取り上げた。
「……大学？」
　飄次郎が、書類にざっと目を通しながら、眉を寄せる。
「ん、そう。千葉……っつーても、房総の方じゃなくて、東京のすぐ近くの方なんだけどさ。そこにあるガッコだよ。いわゆる臨海開発地区って辺りの、その一角にあるのさ」
「その大学に、狗堂が？」
「正確には、大学付属の研究所に出入りしてるらしいんだわ」
「研究所って、何の研究所よ？」
　今までしかめっ面だったランも、興味を引かれて緑郎に訊く。
「大まかに言うなら、生物学」
　緑郎が、答える。
「細かく言うと、キノウケイタイガクとか、ソシキケイタイガクとか、そういうのの研究所らしいんだけどね」
「……わかんない」
「安心してして。オレもわかんないから」
　人差し指で自分の顔を示す緑郎に、ランが、ふん、と鼻を鳴らす。
「しかし、よく嗅ぎつけたな」
「まーね。ウワサの狗堂章ちゃんは、例によってここでも騒ぎを起こしててねえ」
「……」
　飄次郎が、眉を曇らせる。が、そんな表情におかまいなしに、緑郎は続けた。
「だって言うのに、これがまたなかなかケーサツ沙汰にならないわけ。どうも、この大学の研究所自体、かなりでっかいバックがついてるみたいで……ま、官僚機構の腐敗なんてありふれたネタは、オレとしちゃもう飽き飽きなんだけどさ」
「その、騒ぎとかいうのの情報は、手に入れているのか？」
「ん」
　こともなげに肯いて、緑郎ががさごそと封筒をさぐる。
「えーっと、これこれ。ケーサツの皆さんが不法に破棄しようとしていた調書を、独自の

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

流通ルートから手に入れたシロモノだよん」
　飄次郎が、鋭い目で、その書類を睨みつける。
　ランは、そんな飄次郎の顔を、心配そうな顔で横からのぞきこんでいた。

「あたし、あいつ、きらーい」
　マンガだったら、ぷんすか、という書き文字が書かれそうな膨れっ面で、ランが、並んで歩く飄次郎に行った。
「萌木のことか」
「そ、ろくろーのことぉ」
　ランが、十歳は年上の男を呼び捨てにする。
「どうして？」
「だって緑郎、あたしのこと、からかってばっかなんだもん」
「けど、悪い奴じゃない。仕事は確かだし、信用の置ける男だ」
「ぜーんぜん、そうは見えない」
　大またで元気よく歩きながら、ランが言う。
「ま、血族以外の男に気を許さないのは、いいことだ」
　そう言いながら、飄次郎は、交差点の信号を待つべく立ち止まった。
「また、掟の話？」
「そうだ。俺たち犬神筋の血族は、外の連中と血を交わらせてはいけないんだ。絶対にな」
　赤く灯る信号に鋭い一重の目を向けながら、飄次郎が言う。
「でも……あたしは、狗堂さんのお嫁さんになんか、ならないよ」
「もう、それは分かった。それに……」
　飄次郎が、その顔に苦悩をにじませながら続けた。
「どの道、狗堂は数えきれないほど掟を破っている。本家はあいつを許したりはしないだろう」
「……でも、お兄ちゃんは、狗堂さんを、助けたいんだよね？」
「それは、あいつ次第だ」
　信号が青に変わり、通行人が動き出す。
「だが、このままでは、他の追手が来るのも、時間の問題だな……」
　人々の動きの中に身を置きながら、飄次郎は、誰にともなくつぶやいた。

　大通りに面した、小奇麗なファミリーレストラン。
　そのカップルは、店に入ったときから、険悪なムードだった。
　学校指定のブレザーを着た少女と、大学生らしい大柄な男。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

席につき、ぞんざいにコーヒーを頼んですぐ、男は、少女をなじり始めた。
最初は、低く抑えた声で。
その声が、次第に大きくなっていく。
夕食時にはまだ少し早いが、週末で、客は少なくない。男は、そんな周囲の視線が気にならなくなるくらいに、興奮している。
少女は、終始、うつむいていた。
人の好さそうな丸顔に、高校生らしいショートカット。やや伸ばした前髪を、左右に分けている。睫毛が長く、鼻や口元がちまちまとしてて可愛らしい。笑ったところを見たくなるような、そんな顔だ。
その顔を強張らせ、くりっとした目を涙で潤ませながら、少女は、下を向いている。
どう見ても、男の方が悪者に見えるような、そんな構図だ。
そのことが、ますます男を苛立たせている。
少女は、膝の上に置いた手をぎゅっと握りながら、男の罵声に耐えている。
男は、どうやら少女の煮え切らない態度を責めているらしい。
「――あんなに媚びておきながら、さんざ焦らやがって！」
荒げた声で、男が言った。
「そのくせ、高田や岩本にも色目使いやがる」
「ち、違います、あたし、そんなんじゃ――」
「お前、男をからかって楽しんでンだろうが！」
ばあん、と男が、平手で合板のテーブルを叩く。
派手な音をたてて食器が床に落ち、少女が、身を縮めて小さく悲鳴をあげた。
一瞬、店内が静かになり、周囲の視線と囁きが、男に突き刺さる。
「くそ……ッ！」
男が、顔を赤黒く染めながら、テーブルを回りこんで、両手で耳を押さえたまま目をつぶっている少女に手を伸ばそうとする。
思いもかけない修羅場に、客たちが、はっと息を飲んだ。
その時――
「そこらへんにしてくれ」
そんな言葉と同時に、黒い影が、男の前に身を滑らせた。
飄次郎である。黒いジャケットに濃いブルーのシャツ。それに、白いスラックスといういでたちだ。
男の方は、長身の飄次郎よりも、さらに上背があり、横幅も大きい。その逞しい体は、一見ラガーマン風だ。しかし、飄次郎はその顔に、いかなる緊張も浮かべていない。
「何だてめえは！　まさか、お前もこの女の……？」
「初対面だよ」
言いながら、飄次郎は、まだ辛うじてテーブルの上にあった水の入ったグラスを、男の

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

前に差し出した。
「とりあえず、水でも飲んで落ちつけ。そんなんじゃ話もできないだろうに」
「大きなお世話だ！」
　男が、乱暴にグラスを払いのける。壁に当たって砕けたグラスが、細かな水と破片を飛び散らせる。
「てめえには関係ねえだろおが！」
「ああ、関係ないね。けど、関係ない他の客に、迷惑になってるんだよ、お前」
　飄次郎が、すっ、とその一重の目を細めながら、言う。
　男が、一瞬、その瞳の迫力に圧倒されたように、沈黙した。
「お前、狗堂って男を知ってるか？」
　飄次郎が、男にしか聞こえないような小声で、訊いた。
「し、知らねえよ！　それが何の関係があんだよ！」
　内容的にはもっともなことを、いささか大きすぎる声で、男が言う。
「知らないなら俺も用はない。帰っていいぞ。グラスは、俺の方で弁償してやる」
「ざけんなッ！」
　そう言って、男が、飄次郎にその太い腕を伸ばす。
　重く、そしてけして遅くはないその一撃をゆうゆうとかわし、飄次郎は右手を繰り出した。
「げは！」
　奇妙な声をあげて、男が、後方に倒れる。
　飄次郎の貫手が、男の喉元をしたたかに打ったのだ。カウンターの、しかも急所への一撃である。
　だと言うのに、それでも立ちあがった男の体力は、褒められていいだろう。
　が、飄次郎は容赦しなかった。
　まだ体制の整わない男の懐に、そのしなやかな長身を滑り込ませる。
「ッ！」
　また、喉への一撃。
　今度は肉を削ぐような手刀だ。
　テーブルを巻きこみながら、男が再び倒れる。
　飄次郎が、ゆっくりとそちらに近付いた。
　ぜいぜいと喘ぎ、喉を押さえながら、男が、ようやく立ち上がる。
　その、押さえた手の上から、さらに喉への執拗な一撃。
　三たび床に転がり、その姿勢のまま、男は、恐怖に満ちた目で、飄次郎を見上げていた。
　――殺す気か？
　ごつい顔が、そんな原初的な怯えに、歪んでいる。
　飄次郎は、そんな男を、ひどく冷徹な顔で見つめていた。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　狙っているのは、あくまで喉だ。突きか、蹴りか、締めか……。とにかく喉めがけての攻撃をする、と、その一重の目が告げていた。
　起きあがれば、またやられる。男は、そんな恐怖に、尻餅をついたままじりじりと後ずさっていた。
「帰っていいぞ」
　飄次郎が、再び言う。
　男は、喉を両手でかばうように押さえたまま、物も言わずに逃げ出した。
「……余計なことをしたな」
　そう言って飄次郎が振り返ると、少女が、目に一杯の涙を溜めて、こちらを見ている。
「あ、あの、多田原さんは、だいじょぶなんですか？」
　少女は、両手をもみ絞るようにしながら、そんなことを言った。
「ん？　ああ、あいつか？　まあ、しばらくは声が出にくいだろうが、静かになってちょうどいいだろ」
　そんなことを言う飄次郎に、背後から、この店の店長らしき男が、緊張した面持ちで近付いてきた。

「すいません、あたしのせいで、いろいろ弁償させちゃって……」
　しゅん、とした顔で肩を落とし、少女が言う。
「こっちが、勝手に暴れただけだ。気にするな」
「でも……」
「彼氏を殴って悪かったな。俺は、見ての通り短気でね。あんたから謝っといてくれ」
　言いながら、飄次郎は、暮れなずむ街を歩き始める。
「か……彼氏なんかじゃ、ありません」
　てて、と小走りに飄次郎の後を追いながら、少女が言う。
「普通の……ただの友達のつもりだったんです。あの人、タカコとも付き合ってるって話だったし……なのに、最近になって急に……そりゃ、はっきりしなかったあたしが悪かったのかもしれないけど……」
「いや、いきなりそんな話をされても、困る」
「あ、ごめんなさい……」
　少女が、また謝る。
「えっと、でも……せめて、お礼、させてくれませんか？」
「礼？」
「はい。あの、家に、おでんがあるんです。お昼食べた後で作って、それで作りすぎちゃって。それで、今日はお母さん、急な仕事で帰ってこなくて、家に一人だし……。だから、食べてもらえると嬉しいんです。えーっと、き、嫌いですか？　おでん」
　奇妙なくらい真剣な様子で、少女が言う。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

「いや、わりと……特に大根なんか」
　そんな少女の雰囲気に飲まれてしまったかのように、飄次郎は、ついそんなふうに答えてしまう。
「よかったァ。お大根、うんと味が染みてますよっ♪」
　嬉しそうに頬を染めながら、少女が、満面の笑みを浮かべる。
　花が咲いたような、可愛らしく、魅力的な笑顔だ。
「妙なことになったな……」
　飄次郎が、口の中でつぶやき、そして言った。
「えっと、あんた……」
「あ、すいません、言い忘れてました。あたし、水島っていいます。水島詩織」
「みずしま……しおり……？」
　飄次郎の眉が、ぴくりと動く。が、そんな彼の微妙な表情の変化には、少女――詩織は気付いていない様子だ。
「はいです。えーっと、お名前は……？」
「犬月飄次郎」
　思わず飄次郎は本名を答えてしまう。
「いぬづきさん、ですか？　変わった名前ですねー。どう書くんですか？　やっぱり、あのお、ワンちゃんの犬に、空にある月？」
「あ、ああ」
「ステキな名前ですねっ♪」
　そう言って、また、ひどく開けっぴろげな笑顔を見せる。
（隙の多い女だな……）
　内心、飄次郎はそんなことを思っていた。
（これだけ隙があれば、勘違いする男も出てくるな。ま、要するに、子供なんだ）
　などと思いつつも、詩織の微笑みを見ていると、それだけで、何かなごんでしまいそうになってる自分がいる。
　いかんいかん、などと思っている飄次郎の顔を、詩織が、上目遣いで見つめた。
　並んで立つと、ひどく身長差があることに気付かされる。飄次郎が長身な上に、詩織が小柄なのだ。
「――じゃあ、犬月さん、うんとご馳走しますね！」
　そう言う詩織に、飄次郎は、いつになく曖昧な表情で肯いていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

－第二章－

　ひとしきり鍋の中のものを食べ終わった飄次郎は、小鉢に残った汁をおもむろに茶碗の中の飯にかけた。
「あ」
　詩織が、ぽかん、と小さく口を開けるのにもかかわらず、そのまま、ざくざくと飯をかきこむ。まさに犬食いと言った風情だ。
　飄次郎が、とん、と茶碗をコタツの天板の上に置くと、詩織はふーんと声をあげた。
「……犬月さんて」
「ん？」
「あ、いえ、なんでもないです」
　自分が声に出して何か言いかけているのに気付いて、詩織が、わたわたと手を振る。
「俺が、どうかしたか？」
　久しぶりの家庭らしい料理を口にして、ちょっと満ち足りた気分になってしまった飄次郎は、つい、そんなふうに訊いてしまった。
「えと……気を悪くしたらごめんなさい」
　先に謝ってから、詩織は、意を決したように言った。
「犬月さんて……かっこいいのに、ご飯の食べ方が、何だか可愛いなあって」
「はあ？」
　生まれてこの方、可愛いなどと言われたことのない飄次郎は、思わず声をあげてしまった。
「だって、なんだか、男のコみたいな食べ方だなあ、って……あ、ごめんなさい、ヘンなこと言って」
「いや、その……」
　飄次郎は、何を言っていいか分からない、といった表情で、自分が今まで使っていた茶碗を眺めた。
「あ、あのっ、あたし、お茶いれますね」
　そう言って、詩織は、キッチンへと向かった。
　その頬が、桜色に染まっている。
　と、その時、電話が鳴った。
「はい、水島ですけど……お母さん？」
　コードレスの受話器を取った詩織が、声をあげる。
「うん、だいじょぶ……お母さんは？　あ、そうなんだ……」
　器用に肩と頬で受話器を支えながら、お盆にきゅうすと湯呑を二つ乗せ、リビングに運ぶ。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「え？　あ、うん……急だね……いつまで？　そう……そうなんだ……うん、あたしは、だいじょぶだけど……」
　そう話しながら、詩織の顔が、寂しげにかげる。
「うん、分かった……うん、うん……えっと、お母さんも、気をつけてね」
　そして、詩織がさらに何か言いかけたとき、電話が、切れた。
　かすかに眉を曇らせ、詩織は、電話を置く。肩を落としているせいか、その背中が、飄次郎にはいっそう小さく見えた。
「どうした？」
　余計なことだと思いながら、つい、声をかけてしまう。
「え、ああ、えっと、今日、お母さん、帰ってこないって、そういう電話です。――よかった、犬月さんにおでん食べてもらえて♪」
　振り返った詩織は、その顔に笑顔を浮かべていた。
「帰ってこない？」
　遅くなる、としか聞いていなかった飄次郎が、思わず聞き返す。
「はいです。よくあることなんですよ。お母さん、テレビの仕事してて、ロケとかで急に出張したりするんです。犬月さん、視たことあるかなァ？」
　そう言って、詩織が、日本全国で撮影をするような、企画物のバラエティーの名前をあげた。全国ネットで放映している、有名な番組である。
「すまん。テレビは、視ない」
　そっけない口調で、飄次郎が言う。
「あ、そっかぁ。そんな感じですもんねー、犬月さんて」
　ふふっ、と小さく声に出して笑った後、その微笑みが、ひどく寂しそうな表情に変わった。
「実は、あたしも、視てないんです」
「……」
　話の接ぎ穂を失い、飄次郎は無言で頭をかいた。
「父親は、遅いのか？」
　そして、とりあえず、といった感じで、訊く。
「お父さんは、いません」
「……」
　また、無言。
「え、えと……」
　その静寂に耐えられなくなったように、詩織が、何か言いかける。
　と、それを遮るように、飄次郎は立ちあがった。
「じゃあ、いつまでもここにいるわけにもいかないな」
　そう言って、時計を見て時刻を確認する。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「え？」
　心底意外そうな声を、詩織があげる。
「だってそうだろ。一つ屋根の下に、若い娘と一緒に一晩いるわけにはいかない」
「屋根の下って、ここは、マンションです」
　飄次郎の年代物の言い回しを、詩織が大真面目に切り返す。
「……ヘンな噂が立つだろ」
「で、でもっ……！」
　リビングから玄関へ出ていきかける飄次郎の服の裾を、詩織が、ぎゅっ、と握り締めた。
「おい！」
　いつになく慌てた声を、飄次郎があげる。
「ご、ごめんなさいっ！　で、でも、あたし、一人なんて、恐くて……」
「恐い？」
「だって、今日は、多田原さんのこともあったし……」
　しばし黙りこんだあと、飄次郎は、ふー、とため息をついた。確かに、あの男に公衆の面前で恥をかかせたのは自分である。
「……俺のことは、恐くないのかよ」
　思わず、飄次郎は、そんなことを訊いてしまう。
「えーっと……ちょっとだけ、こわい、かな？」
　そんなことを言いながら、詩織は、なぜかにっこりと微笑んだ。

　暗い、研究室の一室。
「ラムダ因子？」
　白衣の中年と向かい合いながら、恰幅のいい白人の男が、そう英語で聞き返した。
「私はそう呼んでますよ、中佐。あくまで仮説ですがね」
「……教授、それは、ウィルスとは違うのですか？」
「似てはいるが、次元の違うもの、と考えていただきたい」
　“教授”が、突き出た腹をゆすりながら、“中佐”に言った。
「細胞内に侵入し、その遺伝情報を書き換えて蛋白質合成などをコントロールする点では、確かにウィルスに似てはいます。が、ラムダ因子は、ウィルスのように盲目的に増殖するようなことはない。むしろ、コントロール化に置いた細胞を変質させ、宿主の運動能力や再生能力を爆発的に亢進させ、そして、各器官の外観や機能までも変化させてしまう。そういうものです」
「それによって、つまり、人が――狼男になる、と」
　“中佐”は、笑いもせずに、言った。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「そうです。ラムダ因子を取りこんだ体細胞は、もはや、ヒトの細胞とは根本的に異なる。いや、我々が今まで目にしてきたいかなる生物の細胞とも異なります。それは、微細な怪物の群体と言っていい」
「モンスター、ね……」
「が、何よりも謎なのは、細胞内に侵入した無数のラムダ因子が、どうやって相互に連絡し、宿主の体をあそこまで統一的にコントロールしているのか、といったことでしょうな」
「我々が相手にしているのは――何と言うか、もはや神の領域に属するものではありませんか？」
　そう言いながら、中佐は、黄色い口髭に半ば隠れた唇を笑みの形に歪めた。
「私は、クリスチャンではありませんからな」
　“教授”が、肩をすくめる。
「ブッディストですか？」
「無神論です」
「それはそれとして……あの、クドウ・アキラとかいう青年。あれは、おとなしく我々の目的に従ってくれるようなキャラクターではないようですね」
「疫病神ですよ、あれは。いずれ始末をお願いすることになるでしょうな」
「――殺すことができるのですか、そのう……」
「ラムダ因子の宿主と言えども、実際は無敵ではありませんよ」
　“教授”が、小さな目に危険な光を浮かべる。
「末梢神経ならともかく、中枢神経細胞……特に脳細胞などには、なぜかラムダ因子は侵入しない。よって、脳を殺すことができれば、あの疫病神と言えども、殺すことはできます」
「脳を……」
「ああ。心臓はダメですよ。ラムダ因子のコントロール下にある血管細胞にとって、心臓が再生するまで自力で血液を循環させることぐらい何でもない。しかし、脳に代わりはありません。直接破壊するでもいいし、脳への酸素の供給を遮断してもいい。長時間呼吸を妨げられたり、頚部を切断されれば、ラムダ因子の宿主とて、死を免れることはできません」
「銀の弾丸ではいかんわけですな」
　“中佐”の下手な冗談に、“教授”は形だけの笑みを返す。
「しかし、クドウが抜けることで、教授の研究が支障を来すのではないですか？」
「別に、研究の対象は、あの男だけとは限らないですからな。例の件、ターゲットを捕捉したのでしょう？」
　“教授”の目が、ますます鋭く光る。
「これはまいった。耳が早いですね」
　“中佐”は、困ったような声をあげ、そして続けた。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「おっしゃる通りです。――すでに、手は打っておりますよ」

　詩織が、電気の消された暗いリビングに入ってきたとき、コタツを置いていた電気カーペットの上で、飄次郎は毛布にくるまっていた。
　枕は、大きなイルカのぬいぐるみである。
　詩織の部屋は、ぬいぐるみだらけだった。大小様々なぬいぐるみの中から、詩織が枕用にチョイスしたのが、このイルカのぬいぐるみだったのである。
「名前があったんですけど、忘れちゃいました」
　ぬいぐるみを飄次郎に渡したとき、詩織は、まるで知人の名前を忘れてしまったような顔で、えへへ、と笑った。
　確かに、枕にちょうどいいぬいぐるみだった。
　そのせいか、飄次郎は、ぐっすりと眠りについている。
　――少なくとも、詩織には、そう見えた。
「……」
　その幼げな顔に似合わない思いつめたような表情で、パジャマ姿の詩織は、ゆっくりと飄次郎に近付いていく。
「犬月さん……」
　そう、詩織が呼びかけたときには、飄次郎は、むく、と置きあがっていた。
　寝巻きの用意などなかったので、Ｔシャツにトランクスのみという格好である。
「あ……起きてたんですか？」
「お前が起こしたんだろ」
　飄次郎が、苦笑いしながら言う。たとえ眠っていても、近付いてくる足音で覚醒するくらいの鋭敏さがなければ、あの狗堂の追手は務まらない。
「どうした？」
　窓からさしこむ下弦の月の光が闇を蒼く照らす中、飄次郎は、訊いた。
「犬月さん……あの……すっごく、ヘンなこと言ってるってことは、自分でも分かってるんですけど……」
　ぎゅっ、と柔らかそうな唇を一度噛んだあと、詩織は、再び口を開いた。
「あたしを……犯して、ほしいんです」
「……なに？」
　飄次郎が、その一重の目を不審げに細める。
　詩織は、痛ましくなるくらいに真剣な顔のまま、それ以上は言わない。
　そして、かすかに震える指で、一つ一つ、パジャマのボタンを外し始めた。
　ブラを付けていない胸元の白い肌が、次第に露わになる。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして詩織は、パジャマの上を脱ぎながら、飄次郎の横に膝をついた。
意外と豊かな半球型の胸の膨らみの頂点に、小粒の乳首がある。
飄次郎は、そんな詩織の胸を思わず見つめた後、慌てて目をそらした。
「犬月さん……」
耳元に口を寄せるようにして、詩織が囁いた。
そして、その小さな両手で、飄次郎の右手を取る。
飄次郎がはっと向き直ったときは、詩織は、その柔らかな胸に、右手を導いていた。
「おいっ！」
掌に広がる、何ともいえないまろやかな感触に、否応なく血液の流れが速まるのを感じながら、飄次郎は乱暴に手を引いた。
「きゃ」
その動きにかえってバランスを崩し、正座していた詩織は、飄次郎の胸に倒れこんでいた。
「どういう、つもりなんだ？」
至近距離から、自分を上目遣いに見つめる詩織に、飄次郎が問いかける。
「あたし……ひどい女なんです」
ぽつん、と詩織はつぶやいた。
「……」
「あたし、ひどいんです……優しくされたくて、男の人に、甘えるだけ甘えて……なのに、ホントは男の人が恐くて……だから、一線を越えられそうになると、逃げ出すんです……ずるいんです……」
しがみつくように、ぎゅっと飄次郎のＴシャツを握り締め、詩織は告白を続ける。
その顔は、まるで父親に許しを乞う童女のように頼りなかった。
「だから……だから、多田原さんが怒るのも、当然なんです……」
「やっぱり、余計なことだったか？」
「そ、そうじゃないです。そんなんじゃないです！」
静かに訊く飄次郎に、詩織はぶんぶんとかぶりをふった。
「ただ、本当に悪いのはあたしだから……あたしだけだから……」
そう言って、詩織は、飄次郎の胸に顔を押し当てた。
胸元が、熱い涙でじわーっと濡れる。
これは、偽りの涙などではないだろう。細かく震える白い肩を見ながら、飄次郎はそんなことを思う。
しかし――
「甘えるな」
突き放すように、飄次郎は言った。
びくっ、と詩織の体が、震える。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「お前は、自分の弱さに甘えてるだけだろう。それで、そんな自分に罰を与えるために、俺に抱かれようってのか？」
　言いながら、肩に手を置き、詩織の体を、そっと離した。
　冷たい口調に反して、それは、ひどく優しい力だった。
「全部自分が悪いなんて考えるのは、弱い自分に甘えてるんだ」
「……」
「お前、あの多田原って男に、好きだって言ったのか？」
「……い……いえ」
　詩織が、震える唇で、ようやくそれだけを言う。
「なら、勘違いしたあいつが悪い。その勘違いを潔く認めず、未練たらたらにお前に迫ったのはもっと悪い」
「でも……」
「そりゃ、お前にも悪いところがあったかもしらん。詳しい事情は俺は知らない。けど、自分のどこが悪くて、相手のどこが悪かったか。それくらいは考えろ。何も考えずに、自分で全部背負って、それで終わりにしようとするな」
「……」
　詩織は、どこか驚いたような顔で、飄次郎の顔を見つめた。
　そして、まるで聞き分けのいい子どものように素直な顔で、こくん、と肯いた。
「ありがとうございます……犬月さん……」
「い、いや、その……柄にもないことを言った」
　憮然とした顔で、飄次郎がそう言う。
「その……俺、妹がいてな……それで、つい、説教癖が出たんだ。悪かったな、何も知らないのに、えらそうなこと言って」
「ううん、いいんです……犬月さんの、言うとおりですから」
　詩織は、ぐい、と涙をぬぐってから、にっこりと微笑んだ。
「真剣にお説教してくれて、嬉しかったです」
「そ、そうか……」
　そう言って、飄次郎は、視線を落とした。
　それに誘われるように、詩織も、視線を下に向ける。
「あ……」
　飄次郎は、決まり悪げな声をあげた。はだけた毛布からのぞいたトランクスの股間の部分が、傍目にも分かるほど立派なテントを張っていたのである。
「あ、待って」
　そう言いながら、慌てて毛布をかぶせようとする飄次郎の手を、詩織が押さえる。
「待てって、どういうことだ？」
「だって、あたしのせいで、こうなったんでしょ？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

妙に真剣な口調で、詩織が言う。
言いながら、詩織は、飄次郎のその部分に、白い手を重ねていた。
「うぁ、かたぁい」
「大きなお世話だ！」
「で、でも、男の人って、したくなると、こうなっちゃうんですよね？」
「それは、そうだが……」
「じゃあ、あたしが、その……します」
「しますって、さっき言ったばかりだろ！」
そう言いながらも、飄次郎は、詩織のぎこちない手つきがもたらすもどかしい快感に、その手を払いのけることができない。
「こ、これは、罰とかじゃありません！　そのう――」
ここで初めて、詩織は、その丸顔をかあーっと赤く染めた。
「これは、お礼、です」
そう言って、構造がよく分かっていないのか、トランクスの布地のあちこちを引っ張りながら、どうにかしてペニスを外に解放する。
そして詩織は、すでに血液を充填させてしまってるその器官に、そっとその白い指を絡めた。
「う……」
その、おっかなびっくりな手付きが妙に新鮮で、飄次郎は、思わず小さく声を出してしまう。
「え、えと……」
が、詩織は、浅ましく静脈を浮かす飄次郎のペニスをきゅっと握ったまま、どうしていいか分からない風情だ。
「お前、やり方わかってるのか？」
蛇の生殺し状態の飄次郎は、思わずそんなことを訊いてしまう。
「し、知ってます！　知識と、しては……」
そう言いながら、詩織は、すり、すり、と竿に添えたその小さな手を上下させた。
ひどく優しいタッチで愛撫されて、飄次郎の意志とは無関係に、ペニスがひくひくと物欲しげに動く。
「えと……これって、気持ちいいんですよね」
「知るか」
詩織よりも、彼女の未熟な誘惑を跳ね除けることのできない自分自身に腹を立てたように、飄次郎が言う。
そんな飄次郎の様子に、詩織は、くすっと笑って、次第に大胆にペニスをしごきだした。
鈴口から透明な液が溢れ、珠のようになる。
「あ……男の人も、濡れるんですね……」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

言いながら、詩織は、その先走りの汁の溜まりを、ちょん、と指先でつついた。
そして、糸を引くその粘液を少し見つめた後、ぬるぬると亀頭に塗りつける。
「くっ」
「あ、い、痛かったですか？」
「い、いや……」
ひりつくような、それでいながらけして不快でないその刺激に、他愛無く眉を寄せながら、飄次郎が短く答える。
詩織は、両手の指先で、ぬるぬると亀頭部分を撫でさすった。
その刺激で、ますますカウパー氏腺液が溢れ出る。
目の前のペニスの快楽の反応に、詩織は、その丸い瞳を潤ませながら、いっそう熱心に愛撫を続けた。
その花のような唇は小さく開き、目元がぽおっと染まっている。
明らかに興奮しながらペニスを手淫する詩織の様子に、飄次郎の劣情はますます高まっていった。
裸の上半身に手を伸ばし、おもいきりその乳房を揉みしだきたい衝動に耐えるように、ぐっと毛布に爪を立てる。
しかし、このまま詩織の手に自らの浅ましいペニスを委ねていること自体が、自身の性欲に負けていることを示しているのだ。
そのことを分かっていながら、飄次郎は、詩織を制止することができない。
先端部分ばかりを重点的に責められ、快美感が、どうにかなりそうなほどに高まっている。
いつしか飄次郎は、はぁはぁと犬のように息を荒げていた。
「苦しいんですか？」
そんな飄次郎に、詩織が、心配そうに訊く。
「い、いや……頼む、最初にしたように、してくれ」
顔から火を吹きそうなほどの羞恥を覚えながら、飄次郎は、とうとうそんなことを言ってしまっていた。
「こう、かな……？」
すでに、ぬらぬらと濡れ光るほどに粘液にまみれた竿を、詩織が、にゅるっ、としごきあげた。
「……ッ！」
さんざんに焦らされた後の待ち望んでいた刺激に、飄次郎は、声を抑えるのがやっとだった。
「感じてるんですね？」
そんな詩織の問いに、半ば無意識に肯いてしまう。
「嬉しい……♪」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　詩織は、心底嬉しそうに目を細め、そして、しゅちゅっ、しゅちゅっ、と竿に手を滑らせた。
　細かく泡立った粘液がその白い小さな手を無残に汚すのも、まったく気にならない様子だ。
　それどころか、ペニスが放つ牡の匂いに惹きつけられたかのように、その可愛らしい顔を飄次郎の股間に近付けていく。
「犬月さんが……あたしの指で、感じてる……感じてくれてる……」
　まるで、うわごとのようにそうつぶやく詩織の息が、敏感な亀頭粘膜をくすぐった。
「嬉しい……あたし、なんだか、すごく嬉しいです」
　そして詩織は、さも愛しげに、飄次郎のペニスにすりすりと頬ずりした。
「あ――」
　思いもかけぬその仕草と、詩織の頬のすべすべとした感触に、飄次郎の性感が呆気なく限界を突破する。
「う、あ、あうッ！」
　不覚にも飄次郎が声を漏らしてしまうと同時に、ペニスの先端から、熱い精液が勢いよく溢れた。
「きゃっ？」
　さすがにびっくりして上体を起こしかける詩織の顔に、びゅるるっ！　と精液が降りかかる。
　いたいけな少女の顔を自らの体液で汚してしまう罪悪感の混じった快美感が、ぞくぞくと飄次郎の背中を駆け上った。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
　荒い息をつきながら、飄次郎は、茫然と詩織の様子を眺めた。
　詩織は、呆れるほど大量の白濁液にまみれた顔で、やはり精液でどろどろになった自分の両手を見つめている。
「あは……あたし、すごいことしちゃった……」
　詩織は、誰にともなく、ぼんやりとそんなことをつぶやいた。

「ったくさ、もう！」
　ランは、思いきりむくれながら、朝の街を歩いていた。
　いつも見かける、同年代の少年少女達が登校している風景が、今日はない。週末なのだ。
「お兄ちゃんてば、いったいどこに泊まってるんだか」
　そんなことを言いながら、人通りのない道路を、コンビニに向かって、一人、歩く。
　昨日の夜、二人で借りているウィークリーマンションに帰らない旨の電話があって以来、

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

飄次郎からは連絡がない。
「まさか……」
　ふと、イヤな想像にかられ、ランはかぶりをふる。
「そんなわけないよ。掟が、あるんだから……」
　そう、つぶやいた時、トレンチコートを羽織り、帽子を目深にかぶった男が、路地の影から踊り出た。
「な……んンーっ！」
　何か言いかけるランの華奢な体を後から抱きかかえ、その口元に、薬くさい濡れた布を押し当てる。
　つん、とした刺激臭に、ランの意識が、急速に遠くなった。
　コートの男は、そんなランに、手早く後手に手錠をかけた。
　と、けたたましい音をたてて、黒塗りの、スモークガラスの４ドアセダンが、ランと、コートの男の傍らに横付けした。
　まるでタクシーのように、左側のドアが自動で開く。
　コートの男は、まるで荷物でも放るように、後部座席にランの小さな体を押し込み、ドアを閉めた。
「It's so easy」
　陽気な口調でそんなことを言いながら、コートの男が、助手席に滑りこんだ。東洋系の顔立ちだが、英語圏の人間らしい。
「りありぃ？」
　と、あまり綺麗でない発音で、運転席に座る男が言う。
　そして、無造作に、左手を繰り出した。
「！」
　コートの男が、ものも言わずに、びくん、と体を痙攣させた。
「ほらお客さん、降りた降りたぁ」
　そんなことを言いながら、運転席の男は、コートの男を外に蹴り出した。
　そして、左手に持っていたスタンガンを助手席に放り投げ、ドアを閉めて急発車する。
「ふー、まっさか、連中の手がここまで早いなんてねえ」
　そう言いながら、巧みなハンドルさばきで車を操っているのは、緑郎だった。
「って、もう仲間を呼ばれたか。早すぎ！」
　バックミラーに写る何台かの同じような黒塗りセダンを確認し、緑郎が毒づいた。
　そして、スピンターンで大通りに出て、一気にアクセルを踏みこむ。
　慌てて路肩によける他の車のクラクションをあとにしながら、緑郎は、立て続けに三つの赤信号を無視した。
「んんん……」
「おやおや、お姫サマ、お早いお目覚めで♪」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　後部座席で起きあがるランの気配に、緑郎が陽気な声をかけた。
「頭、いたァ……って、緑郎！」
「おっはろー♪」
「あ、あんた、やっぱ悪いヤツだったのねえ！」
　そう言いながら、ランは、両手を戒められたままの不自由な態勢で、運転席のシート越しに緑郎の背中に蹴りを入れる。
「あばばっ！　危ないって！　誤解だよお！」
「何が誤解よオ！」
「だからオレは、ランちゃんをさらおーとしてるヤツらの運転手と入れ替わって、車を奪ってさあ……いっててて！」
「ウソばっかり！　早くこの手錠外しなさいよっ！」
「いや、オレ、けっこうそーいうシチュも萌えるヒトなんだけど……いだ！」
　緑郎の減らず口に、ランが、再び蹴りを繰り出したとき――
　びしっ！　と音をたてて、リアウィンドの窓ガラスに、クモの巣状のひびが入った。
「な……」
「あはは、撃ってきた撃ってきた♪　あいつら、何て言い訳する気だろ？」
「ど、どういうこと……？」
「顔上げちゃダメだよ！」
　いつになく緊張した声でそう言われ、後を向きかけたランは、慌てて頭を引っ込めた。
「事情は後できちんと説明するし、手錠も何とかするから、今は、オレのことを信用しておとなしくしてくれる？」
　緑郎が、さらにスピードを上げ、時に対向車線にまで車をはみ出させながら、言った。
　ランは、思わず肯いてしまう。
「ありがと♪」
　緑郎は、ランにそう言ってから、バックミラー越しに微笑んで見せた。

「下手に動くな？」
　緑郎からの電話を受けた飄次郎は、思わずオウム返しに言った。
「それってどういう……何？　いや、電波が届きにくいらしいんだが」
　言いながら、シンプルなデザインの携帯電話を耳に押しつける。
「移動中なのか……。カーチェイス？　一体、誰が相手なんだ？」
　緑郎の答えに、飄次郎の眉が険しく寄せられる。
「分かった……部屋には戻らない。おとなしくするさ。――ランは元気なんだな？　ああ、俺もいつも元気過ぎて困ってる。お前もせいぜい困ってくれ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そう言って、飄次郎は表情を元に戻し、それからかすかに苦笑いを浮かべた。
「じゃあ、その……ランを、頼む」
　そう言って、飄次郎は、携帯を切った。
　そんな飄次郎の様子を、詩織が、朝食の用意をしながらじっと見つめている。
　ワカメと油揚げの味噌汁に、焼き海苔と納豆と刻みネギ。フライパンから皿に移されたばかりの卵焼き。白菜の漬物。梅干。
「ランさんって、妹さんですか？」
　屈託のない笑顔を浮かべながら、詩織が訊く。
「そうだ……。盗み聞きか？」
「違いますよお。だって、犬月さんの声、おっきかったですもん」
「……」
　詩織の言葉に、飄次郎は口をへの字に曲げる。
「さ、朝ご飯にしましょ♪」
「あ、ああ……」
　すっかり詩織のペースに飲みこまれた飄次郎が、曖昧に肯く。
「和食ですけど、いいですよね？」
「ああ」
「犬月さんは、和食派ですか？」
「好き嫌いはないつもりだ」
「ふーん。じゃあ、お昼はピザでもとります？」
「――ちょっと待て」
　飄次郎は、取り上げかけた箸を置いて、言った。
「何だ？　昼って」
「あ、気が早かったかな」
　ぺろ、と詩織がピンク色の舌を出して言う。
「そうじゃなくて……俺は、そこまで世話になるつもりは……」
「お部屋には、帰らないんですよね」
　んふふっ、と詩織が微笑んだ。
「別に、行く当てくらいはある」
「でも、おとなしくしてるんでしょ？」
「お前なあ……」
「借金取りですか？　それとも、前の彼女が追っかけてるとか」
「そんな呑気な話じゃない」
　そう言いながら、飄次郎は、再び箸を取り、味噌汁をすすった。
「飯を食わせてもらったことは感謝してる。が、あんまり立ち入ったことは訊くな」
「あ……ごめんなさい……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

しゅん、としおれた花のように、詩織がうつむく。
「でも……でも、えっと、ご飯のことは、余計なお世話じゃ、なかったんですよね？」
そう言いながら、詩織は、上目遣いに飄次郎の顔を見た。
「あ、ああ……」
「じゃあ、お礼、いいですか？」
「礼？」
飄次郎は、怪訝そうな声をあげる。
「はいです。あ、言葉じゃなくて、そのう……態度で、示してもらえたらなあ、って……」
気弱な小悪魔、といった感じの目つきで飄次郎の顔を見ながら、詩織は、そんなことを言った。

「……いいかげん、体がキツくなってきたんだが」
「ご、ごめんなさい。これで、最後にしますから」
「まあいいが……ほれ」
「きゃ、すっごく熱くなってる〜」
「そんなに乱暴に握るなよ」
飄次郎が呆れたように言った。
「割れたらケガするぞ」
「はぁい。あ、コレ、新しいやつです」
そう言って詩織は、古い蛍光灯を床に置き、新しいものをパッケージから出して渡す。
イスの上にのった飄次郎は、ホコリまみれになった手で、最後の蛍光灯を取りつけ終わった。
「じゃあ、点けてみますね。……うわ〜、あっかる〜い♪」
見違えるほどに明るく部屋を照らすようになった室内灯に、詩織は、無邪気な歓声をあげた。
「助かりましたあ。あたしもお母さんも、脚立とか出さないと、ぜんぜん手が届かないから」
「大したコトじゃないさ」
カバーを取りつけ、イスから降りながら、飄次郎が言う。
「あ、何だか、ホコリまみれになっちゃいましたね」
申し訳なさそうに、詩織が言った。
今日一日、飄次郎は、水島家の掃除を手伝わされたのである。
２ＬＤＫのこの部屋は、それなりにきちんと掃除されていたのだが、男手でないと動かせない家具の裏側や、住人の手の届かない場所などには、意外なほどに汚れが溜まっていた。
最後に、切れかかった蛍光灯を総取り替えした時には、飄次郎は、頭からかなりホコリ

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

っぽくなってしまっていたのである。
　日が、すでに傾きかけていた。
　緑郎からの続報は、まだ、ない。
「えーっと、オフロ、沸かしますね」
　詩織が、ごく自然な口調で、そう言った。

「ふーっ……」
　温かな湯船につかると、さすがに一息ついた。
　バスタブの縁に肘をつき、ぼんやりと天井を見上げる。
　水島家の風呂は、ユニットバスでありながら、充分以上に広かった。
　薄いベージュの、ＦＲＰ樹脂の天井が、白い湯気にかすんで見える。
「……」
　飄次郎は、ふと、昨夜のことを思い出した。
　淡い月光に照らされた、詩織の、柔らかそうな裸体……。
　華奢な、女として成熟する手前の、まだ少女らしさを多分に残した体。
　それでいながら、意外なほど豊かな、白い胸。まだ掌に残る、生々しいその感触――。
「俺は、何を考えてるんだ？」
　自戒するように、飄次郎はつぶやいた。
　――我が一族の外に、血を漏らすべからず。
　――我が一族の中に、血を迎えるべからず。
　そんな、血族の掟を、心の中で唱えてみる。
　しかし、体の中でざわめく血は、一向に治まろうとしなかった。
（いっそ、水でも浴びるか……）
　そう、飄次郎が思ったとき――
　からからから、と妙に軽やかな音をたてて、スライド式の扉が開いた。
「！」
　ざばっ、と音をたててながら、飄次郎が体を起こす。
　その、可愛らしい小さな口を、ぎゅっと結んだ詩織が、バスタオルを体に巻いて、そこに立っていた。
　白い、形のいい脚が、露わになっている。
「は……入り、ます」
　そう宣言して、詩織は、浴室に入り、扉を閉めた。
「ど、どういう」
「聞いてください」
　どういうつもりなんだ、という飄次郎の言葉を遮って、詩織が言う。
「あたし……あたし、まだ……男の人が、恐い、です……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　飄次郎の方を向かないように、床の一点を凝視しながら、詩織は、続けた。
「あたし……最初が、その……レイプで……そ、それ以来……あたし……」
　その声が、細かく、震えてる。
「あ、同情してほしいとか、そんなんじゃないんです……そうじゃなくて……あたし……違う……こんなこと言いたいんじゃなくて……」
「……」
　飄次郎は、腰を浮かしかけた姿勢で、息をするのも忘れて、次の詩織の言葉を待った。
「あたし、犬月さんが、好きです！」
　顔を上げ、真っ直ぐに飄次郎の顔を見つめ、詩織は、言った。
「会ってまだ、一日しか経ってないし、どこの、どういう人なのか、ぜんぜん知らないけど、でも好きです！　好きなんです！」
「……」
　飄次郎は、まるで電撃に打たれたように、体を硬直させていた。
「俺は……」
　言うべき言葉が、頭の中でまとまらない。
（俺は――）
（名前を聞いたときに、気付いていた……）
（知っていたんだ。お前が――犯されたことを）
（半年前……狗堂が、お前の事を……）
（なのに、俺は、知っていて、拒んだ……傷ついているお前を……血の掟を守るために……）
（俺を……そんな卑怯な俺を……）
「俺……」
　飄次郎が、口に出してそう言ったとき、びく、と詩織の体が震えた。
　その目に、涙が溜まっている。
　力を込めて抱き締めれば折れてしまいそうな、華奢な肩のライン。
「俺は……」
　飄次郎は、湯船の中で立ちあがっていた。
　そして、洗い場に出て、詩織の前に立つ。
　詩織が、すぐそばの飄次郎を見上げた。
　詩織の黒い瞳に、飄次郎の顔が映っている。
「詩織……」
　初めて、飄次郎が、詩織の名を呼んだ。
「ひょ、飄次郎、さん……っ！」
　ぎゅっ、と詩織が、しがみつくように飄次郎の体に抱きつく。
　細い腕で、哀しいくらいに、一生懸命に。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

その詩織が、今抱いている男の体に対する恐怖におののいているのが、飄次郎には感じられた。
飄次郎が、詩織の体を、抱き締める。
その震えを、止めようとするかのように。
「詩織……」
飄次郎の声に、詩織が顔を上げた。
濡れた前髪が何本か、おでこにはりついている。
すがるような、詩織の表情。
飄次郎は、何を言っていいか分からない。
だが、何をすべきかは、分かりすぎるほどに分かっていた。
飄次郎が、胸にこみあげてくる痛いくらいの激情を感じながら、詩織の花びらのような唇に、唇を重ねる。
「んん……っ」
詩織の閉じた目から、涙が一筋、頬を流れた。
そして、詩織がかすかに身じろぎした拍子に、その体にまとっていたバスタオルが、洗い場の床に落ちる。
「ん……ん……んン……んっ……」
二人は、互いの体に腕を回し、少しでも隙間をなくそうとするかのように、ぴったりと体を重ね合わせた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

－第三章－

　飄次郎は、詩織の体を、柔らかなバスタオルで丁寧にぬぐった。
　詩織は、顔を真っ赤にさせながら、おとなしく飄次郎にされるがままになっている。
　湯気でしっとりと濡れた髪が、詩織の雰囲気を少し変えていた。
　笑顔の似合う明るい顔が、まるで、朝露に濡れた野の花のように、どこか憂いを含んで見える。
　詩織の体を拭き終わってから、飄次郎は、どうにもたまらなくなって、彼女の唇に優しく口付けた。
　そして、詩織の小さな体を、ひょい、と抱きかかえる。
「きゃ……」
　さすがに詩織は、小さく叫び声をあげてしまった。二人とも全裸のままなのだ。
　だが、飄次郎は、平気な顔で、詩織を抱きかかえたまま、廊下を歩く。
　肩と膝を両腕で支えた、“ お姫様だっこ ” などと呼ばれている格好だ。
　そのような格好だと、詩織の体の小ささが、余計に際立って見える。
　飄次郎は、詩織を抱えたまま、器用にドアを開けて、彼女の部屋に入った。
　大小さまざまな種類のぬいぐるみが、とぼけたような顔で、部屋のあちこちに並んでいる。
　詩織が、恥ずかしそうに、飄次郎の胸に顔をうずめた。
「ぬいぐるみに見られるのが恥ずかしいのか？」
　やや苦笑しながら、飄次郎が訊く。
「す、すこし……」
　小さな声でそう答える詩織の小さな体を、飄次郎は、ベッドに横たえた。
　夕方。すでに日は暮れかかっている。西に面した詩織の部屋で、夕日に照らされたその体は、オレンジ色に輝いているようにも見えた。
　飄次郎が、詩織の肩の両脇に、両手をつく。
　上から覗き込む飄次郎の一重の目と、下から見上げる詩織の長いまつげに縁取られた目が、互いを見つめ合った。
　飄次郎の眉が、かすかに寄せられている。
「飄次郎さん……迷ってます？」
　と、詩織が、そんなことを訊いた。
　飄次郎が、その顔に驚いたような表情を浮かべる。
「ああ……少しだけ、な」
　正直に、飄次郎は言った。
　血族の掟が、見えない鎖となって、飄次郎の心を縛っている。その掟に従うことで、彼

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

はこれまで彼でいられたのだ。
　しかし――
「……飄次郎さんの、好きなようにしてください」
　そう言って、詩織は目を閉じた。
「あたし、何されても……何もしてもらえなくても……それで、いいですから……」
「……詩織は、どうしてほしいんだ？」
　飄次郎が、詩織の耳元に口を寄せて、訊いた。
「えと……い、いっぱい、さわってほしいです……」
　消え入りそうな声で、詩織が、恥ずかしそうにそんなことを言う。
「……分かった」
　そう言って、飄次郎は、詩織に寄り添うようにベッドに横たわった。詩織の右側だ。
　すぐそばにある男の体の気配に、詩織が緊張しているのが分かる。
　飄次郎は、横になっていても形を崩さない詩織の胸の膨らみに、そっと右手を重ねた。
　すでに一度触れたことのあるその部分の、瑞々しい弾力が、手の平に広がる。
　そのまろやかな柔らかさを思いきりも揉みしだきたい衝動に耐えながら、飄次郎は、ゆっくりと右手を動かした。
　円を描くようにしながら、壊れ物を扱うように優しく、詩織の白い乳房をまさぐる。
「ンっ……」
　詩織が、かすかに眉根を寄せ、小さく喘いだ。
　緊張のせいか、あまり快感を感じている様子ではない。
　飄次郎は、はやる気持ちを抑えながら、詩織の左の乳房を、ゆるゆると揉んだ。
　そして、右の乳房に、顔を寄せ、胸の膨らみの頂点にある小粒の乳首を、口に含む。
　飄次郎は、口の中で詩織の乳首を舌でまさぐり、舐め回した。
「ん……んふ……ふ……ぅン……」
　次第に、詩織の声の様子が変わってきた。
　控え目な喘ぎに、どこか、甘えるような響きが混じっている。
　飄次郎の右手と、そして口の中で、左右の乳首が、それぞれぷくん、と立っていくのが感じられる。
　小生意気に勃起した乳首を、飄次郎は交互に口に含み、丁寧に舐めしゃぶった。
　飄次郎の唾液に濡れ、ピンク色の乳首が、ますます固くしこっていく。
「はぁ……あ……あン……ン……ンふっ……ふあン……」
　ぴくん、ぴくん、とその小さな体が反応するのが、可愛らしい。
　飄次郎は、いつしか夢中になりながら、詩織の乳首を吸い、ちゅるん、ちゅるん、と唇でしごくように刺激していた。
　詩織は、シーツをぎゅっとつかみ、まるでさらなる愛撫をねだるように、体を弓なりにそらしている。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

ひとしきり、詩織の胸を責め終わった後、飄次郎が顔を上げた。
左手で詩織の肩を抱き、右手で乳房をゆるゆると揉みながら、再び彼女の耳元に顔を寄せる。
「感じるか？」
そう訊かれて、詩織は、かーっと顔を赤く染めた。
「か……感じ、ます……」
それでも、小さな声で、そう答える。
「嫌じゃないか？」
「イ、イヤじゃありません……だって……飄次郎さんが、触ってくれてるから……」
そういいながら、詩織が、うっすらと目を開く。
濡れたようになった黒い瞳が、至近距離にある飄次郎の顔を見つめる。
「じゃあ、次はこっちだ」
そう言いながら、飄次郎は、詩織の股間に右手を伸ばした。
「あ……っ」
そう声をあげながらも、詩織は、飄次郎の手の動きを目で追ってしまった。
飄次郎の手が、詩織の茂みに触れる。
控え目に恥丘を飾る黒いヘアは柔らかで、そしてスリットの周辺はまったくの無毛だった。
胸を愛撫されたためか、その部分は熱く火照り、意外なほどに愛液で濡れている。
飄次郎は、その淫らな液を指に絡めるように、詩織のその部分をまさぐった。
童女のように縦線一本だったスリットが、まるである種の花のように次第にほころんでいく。
「はぁ、はぁ、はぁ、はぁ……」
詩織は、熱い吐息を漏らしながら、まるで何かに憑かれたように、飄次郎に愛撫される自分の大事な部分を凝視していた。
「どんどん濡れてくるぞ」
飄次郎が、いささか意地悪な口調で、そんなことを言う。
「だ、だってェ……」
「気持ちいいのか？」
「は……はい……気持ち、いいんです……」
素直にそう答え、詩織は、耳まで赤くしながらうつむく。
飄次郎は、詩織に気付かれないように、ほっと安堵の息をついた。
心に傷を抱えながら、自分の愛撫で感じている詩織が、たまらなく愛しい。
自分が癒せるものなら、癒してやりたいと、そう思った。
「きゃん」
詩織が、首をすくめるようにして、声をあげた。飄次郎が、詩織のうなじを舐め上げた

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

のだ。
「あ、ああっ……ンあ……はン……」
　飄次郎は、詩織の秘所を愛撫しながら、首筋から鎖骨のくぼみ、乳房の脇へと、舌を這わせていく。
　詩織は、ベッドの上で身をくねらせながら、ふうン、ふうン、と主人に媚びる子犬のような鼻声をあげていた。
　飄次郎の頭部が、詩織の股間に到達した。
「あ……っ！」
　その時になって、ようやく飄次郎の意図に気付いたのか、詩織が慌てたような声をあげる。
「ダ、ダメです、そこは……ひゃん！」
　詩織の言葉が、自らの悲鳴によって途切れる。
　飄次郎が、愛液に濡れた詩織のクレヴァスを、舐め上げたのだ。
　蜜をたたえた秘裂を、下から上へ、舌でえぐるようにする。
「そ、そんな……ダメえ……そこ、きたない、です……」
　詩織が、泣きそうな声をあげる。
　しかし飄次郎は、まるでミルクを舐める犬のように浅ましい音を立てながら、詩織のそこを長い舌で嬲った。
　ピンク色の肉襞がひくひくと息づき、熱い愛液を分泌する。
「ダメえ……ダメえ……」
　詩織は、声をあげながら、飄次郎の頭を両手で押しのけようとした。
「気持ちよくないか？」
　少し顔を上げて、飄次郎が訊く。
「え？　……それは……そ、そのぅ……」
「本当に嫌なら、やめる」
「イ、イヤって言うか……だって、きたないですよ……」
「汚くなんかないさ」
　そう言って、飄次郎は、愛液に濡れ光るその部分に、ちゅうっ、とややキツく口付けした。
「ああン……」
　詩織が、身じろぎする。
　その両手の力がゆるんだところで、飄次郎は、クンニリングスを再開した。
　丸い、小ぶりのヒップを捧げるように持ち、ぴちゃぴちゃと音をたててクレヴァスに舌を這わせる。
　そして、襞の間を舌でなぞり、尖らせた舌先を膣口に差し入れた。
「ひッ！　ああっ……う……ンあああああッ！」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

強すぎる性感に背中をのけぞらせながら、詩織は、飄次郎の髪の間に指を食いこませた。
そして、知らず知らずのうちに、飄次郎の頭を、自らの恥ずかしい部分に押しつけてしまう。
飄次郎が、舌で、まだ包皮に包まれたままのクリトリスを刺激した。
「あっ……はああン！」
明らかな歓喜の声を、詩織はあげてしまう。
「そ……そこはァ……あ……ンあッ！　ひ……あア……ひゃうン！」
詩織があげる媚声を聞きながら、飄次郎は、クリトリスを唇で挟むようにし、ちろちろと舌でバイブレーションを送った。
「ンはあああああん！」
とぷとぷと溢れる熱い液が、会陰を伝い、シーツを濡らす。
飄次郎は、舌と唇で敏感な肉芽を愛撫しながら、右手の人差し指で、膣口の周囲をまさぐった。
すっかり熱く、柔らかくなった靡肉が、まるで指先にまとわりつくようだ。
「指、挿れるぞ……」
飄次郎が、詩織にそう言う。
しばらくして、詩織が、こくん、と肯いた。
飄次郎は、ゆっくりと、右手の中指を詩織の中に侵入させていった。
「あ、あああぁ……っ」
まだ挿入に対しては恐怖心があるのか、詩織の声はかすかに震えている。
飄次郎が、再び詩織のクリトリスを唇に咥えた。
そして、ゆっくり、ゆっくり、指を膣内に入れていく。
熱く濡れた粘膜が、痛いくらいにしっかりと、飄次郎の指を握り締めた。
「は……あぁ……ン……はぁ……っ」
とうとう、飄次郎は、根元まで指を差し入れた。
みっちりと中指を締め付ける膣肉の感触は、予想以上にきつい。
「痛いか？」
そう、詩織に訊く。
「い、いたくは、ないです……」
はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、と大きく息をつきながら、詩織が答える。
「なんだか、すごく……その……入ってる、って感じで……」
言葉を探すような口調で、詩織が言う。
「動かすぞ」
飄次郎がそう言うと、詩織は、また、こくん、と素直に肯いた。
飄次郎が、指をピストンさせ始める。
「あっ、あっ、あっ、あっ……」

Yeon PDF Driver Trial
www.yeon.com.tw

その指の動きに合わせて、詩織は、断続的に声をあげた。
形のいい眉は寄せられ、目尻には、うっすらと涙が浮かんでいる。
飄次郎は、さきほどとは逆のルートをたどるように、腰からお腹、乳房、首筋へと、キスをしながら頭を移動させた。
指は、動かしたままだ。
無論、激しい動きではない。それでも、詩織にとっては、快感より異物感の方が強いようだ。
やや辛そうな詩織の顔を、飄次郎がすぐそばから覗き込む。
「大丈夫か？」
そう訊くと、詩織は、眉をたわめながらも、にこっと笑った。
そして、右手を、飄次郎の股間に伸ばす。
「あ……」
その小さな手にペニスを握られ、飄次郎は、思わず声をあげていた。
「あは……かたくなってますね……」
きゅっ、と優しくシャフトに指を絡めながら、詩織がそんなことを言う。
「詩織……」
強すぎも、弱すぎもしない力でペニスを握られるもどかしいような快感に、飄次郎の声は、他愛もなく上ずっていた。
「飄次郎さん……気持ちいいんですか……？」
きゅっ、きゅっ、とペニスを握る手に力を込めながら、詩織が訊く。
「……ああ」
飄次郎が、ひどく答えにくそうに答えた。
「んふ……飄次郎さん、やっぱり、なんだか可愛い……」
そう言いながら、詩織は、もうすっかり勃起している飄次郎のペニスの表面に手を滑らせた。
たちまちに先走りの汁が鈴口から溢れ、詩織の手を汚していく。
詩織の手の動きが、だんだんとスムーズになっていった。
しゅちゅっ、しゅちゅっ、といったような湿った音が、かすかに響く。
「う……」
飄次郎は、思わずうめきながら、止まっていた右手を動かした。
中の感触が、先ほどとは違って、驚くほど滑らかになっている。
柔らかい力で指に絡みつきながらも、痛いほどのきつい締め付けはなくなっていた。
「あ、あン……なんか……きもち、いい……です……」
うっとりとそう言いながら、詩織は、飄次郎のペニスをしごき続ける。
「飄次郎さんも、いいんですよね……きもちいいんですよね……？」
「ああ……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

荒く息をつきながら、飄次郎が短く答える。
「うれしい……あたしたち、いっしょに、きもちよく、なってる……」
切れ切れにそう言いながら、詩織は何かをねだるような目で飄次郎を見つめた。
飄次郎が、詩織の顔に顔を寄せる。
が、最後の距離を詰めたのは、詩織の方だった。
枕から頭を浮かせるようにして、飄次郎とキスをする。
二人の右手は、互いの性器を愛撫し続けたままだ。
「ン……んぷ……うン……ふ……う〜ン♪」
甘い鼻声を漏らしながら、詩織が、飄次郎の唇を吸う。
飄次郎は、そんな詩織の唇を舌でこじ開け、舌先を口内でうごめかせた。
互いの舌が絡み合い、ぷちゅ、ぷちゅ、と唾液の泡がはじける。
ようやく口を離すと、二人の唇の間で、唾液の糸が下向きのアーチを描いた。
「はぁあ……ン」
幸せそうな声をあげる詩織の瞳が、うるん、と潤んでいる。
「飄次郎、さん……」
詩織が、濡れた声で言う。
「詩織……」
「い……いれて、ください……」
「……ああ」
詩織のはしたない申し出に肯いて、飄次郎は、詩織の脚の間に、腰を置いた。
そして、詩織の白い脚を、さらに広げる。
詩織は、赤い顔のまま、自分の股間と、飄次郎のペニスとを交互に見つめていた。
「あたしのアソコ……すっごいエッチ……」
両手で口を覆いながら、詩織がそんなことを言う。
そして、左手で口元を隠したまま、再び飄次郎のペニスに右手を伸ばした。
「積極的だな」
飄次郎が、ペニスに詩織の指先を感じながら、言う。
「だって……な、なんだか、安心するんです」
「……変な奴」
そう言って、飄次郎は、その一重の目を閉じた。
そして、何かを決心したかのように、すぐに目を開き、詩織の右手に導かれるように、ゆっくりと腰を進める。
赤黒い亀頭が、濡れそぼるクレヴァスに触れた。
飄次郎が、左手で、詩織の右手をそっと外す。
そのまま、両の手の平を合わせるように握り、体を前に進ませた。
「あ……」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

飄次郎のペニスが自分の中に侵入していくのを、詩織は、じっと凝視していた。
その瞳には、不安と期待とが複雑に見え隠れしている。
それでも、詩織は目をそらそうとしない。
ぐうっ、と飄次郎が腰に力を込めた。
亀頭部分が、詩織の小さな膣口をくぐる。
「あッ……」
びくっ、と身をすくませる詩織の華奢な体に、飄次郎が覆い被さった。
「あン……ひょ、飄次郎さぁん……」
「ん？」
「これじゃ、は、入ってるとこ、見えないです……」
そんなことを言う詩織に、飄次郎はふっと笑いかけた。
「ひどいです……笑うなんて……あたし、自分が飄次郎さんと一緒になるトコ……きちんと見たかったのに……」
「悪いな、詩織」
そう言いながら、飄次郎は、きゅっ、と詩織の体を抱きしめた。
「あ……っ♪」
詩織も、飄次郎の背中に、腕を回す。
「俺、もう我慢できないんだ……お前を、こうしたくて……」
そう言いながら、詩織を抱き締める腕に、力を込める。
「あ、あ、あぁン……！」
詩織が、精一杯の力で、飄次郎の体を抱き返す。
飄次郎は、詩織の体を腕の中に収めながら、ずずずっ、とさらにペニスを挿入させた。
「ひあ……っ」
膣肉を内側から押し広げられる圧倒的な感覚に、詩織が声をあげながら、その体をのけぞらせる。
飄次郎の挿入は、まだ終わらない。
「す、すごい……です……あ、ああ、ア……ひあン……」
逞しい雁首に、膣内粘膜をずりずりとこすられる感触に、詩織は、悲鳴のような声をあげる。
ようやく、詩織のその部分が、飄次郎のペニスを根元まで飲みこんだ。
「はあァ……」
詩織が、ため息に似た恍惚の声をあげる。
「詩織……キツいか……？」
飄次郎が、詩織の耳元で囁く。
「ううん……平気、です……。す……すごく、飄次郎さんを、感じます……」
はぁっ、はぁっ、と息をつきながら、詩織が答える。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　内部の熱い温度と、ぴったりと吸いつくような感触に、飄次郎は、そのままでいても精を漏らしてしまいそうだった。
「詩織……」
　耳朶に熱い息を吹きかけながら、飄次郎はつぶやいた。
　その声は、かすかに震えているようだ。
「好きだ、詩織……」
「え……？　あ、あッ！」
　聞きかえそうとする詩織のその部分を、飄次郎のペニスが、大きくえぐった。
　そしてそのまま、ぐうっ、ぐうっ、と抽送を始める。
「ひょ、ひょうじ、ろう、さん……ッ！」
　強烈な刺激に、詩織は、思わず飄次郎の背中に爪をたてていた。
　しかし、飄次郎の動きは止まらない。
　それどころか、抽送のストロークは次第に大きくなり、その上、リズムが少しずつ速くなっていった。
　愛液にまみれながら出入りする、静脈を浮かしたシャフトに、詩織の靡肉がいやらしく絡みついている。
「ンあッ！　はン！　ン！　あンッ！　はうン！　んンっ！」
　詩織は、抽送のリズムに合わせ、短い悲鳴のような声をあげ続けた。
　抜かれるときには、充血した肉襞がめくれあがり、差し入れられるときには、その肉襞が一緒に体内に押し入れられる。
　飄次郎は、犬のように荒い息をつきながら、ますます激しく腰を動かした。
　単純だが、力強い動きを、飄次郎が詩織の中に送り込む。
「詩織……悪い、俺……体が、止まらない……」
　飄次郎が、いつもとは明らかに違う口調で、そんなことを言う。
「だ、だいじょぶ、です……あたし……ンっ！　んあん！　き、きもち……いい……っ！」
　詩織が、うわ言のように頼りない調子で、そう言った。
「いいのか？　詩織」
「はい……あ、ああッ！　いい……いいです……あ！　あ、あたし……か、感じてるぅ……っ！　いいの……いい……っ！」
　言葉に出して、初めてその圧倒的な快感に気付いたように、詩織がそう繰り返す。
　じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぷっ、じゅぷっ、という淫らに湿った音が、その声に重なった。
　二人の結合部からは、白く濁った愛液が止めど無く溢れ、ペニスの激しい動きにしぶきを散らしている。
「詩織……っ」
　飄次郎は、激しい抽送を中断し、一回り大きくなったペニスを、深々と詩織の中に差し

Yeon PDF Driver Trial
www.yeon.com.tw

入れた。
　そして、腰をグラインドさせ、ペニスで詩織の蜜壷をかき回すようにする。
「ひあああああああンっ！」
　明らかな歓喜の声をあげて、詩織が、きゅううっ、と無意識に膣肉を収縮させた。
　凄まじい快感が飄次郎の背筋を駆け上り、射精感が、耐えられないほどに高まっていく。
「し、詩織……俺、もう……」
　飄次郎が、まるで子供のような声をあげた。
　その気配を察したのか、詩織が、逃すまい、とするかのように、両の脚を飄次郎の腰に絡みつける。
「詩織……」
　飄次郎が、詩織の顔を見つめた。
「おねがい、飄次郎さん……最後まで……最後まで、いっしょに……！」
　両手両足で飄次郎の体にしがみつきながら、涙目で、詩織が訴える。
「詩織っ！」
　こみあげてくる愛しさと欲情に突き動かされるまま、飄次郎は、抽送を再開させた。
　詩織の繊細なその場所を壊しかねないほどに激しく、その剛直を激しく繰り出す。
「ひあああッ！　あ！　ンあッ！　ああアーッ！」
　詩織が、切羽詰った声をあげた。
　初めて経験する絶頂を前にして、詩織の、まだ成熟しきっていない体がうねり、のけぞる。
　まるで射精をねだるように、きゅんきゅんと柔らかく締めつけ、絡みつく詩織の膣肉の動きに、飄次郎の我慢の限界は呆気なく突破された。
「くううッ！」
　ペニスの中心にある輸精管を、大量の熱い精が駆け抜ける快感に、飄次郎は、思わずうめいていた。
　そして、その凄まじい量のスペルマを、詩織の体内深くで、激しく迸らせる。
「ひあああああああああああああああああああああああああああああああああああッ！」
　びゅるるっ！　びゅるるっ！　びゅるるっ！　と何度も何度も熱い精を膣奥に叩き込まれ、詩織は、叫び声をあげていた。
　びくん！　びくん！　びくん！　と詩織の華奢な体が、飄次郎の腕の中で何度も痙攣する。
「あ……あぁ……あ……あぁぁ……」
　びゅーっ、びゅーっ、と、呆れるほど長く続く射精に、飄次郎が茫然としたような声をあげる。
　そして、ようやくそれが終わったとき、飄次郎は、ぐったりと体を弛緩させた。
　詩織のその部分が、さらにスペルマを搾り取ろうとするかのように、きゅううん、と収

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

縮しているのが、感じられる。
　詩織の体は、まだぴくぴくと震えていた。
　絶頂から、帰ってきていない様子である。
　さすがに飄次郎が少し心配になった頃に、ようやく、詩織の痙攣が収まった。
　くったりとなった詩織の目尻から、珠のような涙が、一筋、こぼれ落ちる。
「詩織……」
　飄次郎は、涙を、そっとキスでぬぐった。
「ん……」
　詩織が、かすかに声をあげ、うっすらと目を開ける。
「あ……あれ……？」
　そして、不思議そうに飄次郎の顔を見る。
「あの……あたし、どうなっちゃったんですか……？」
　ぽやん、とした顔で、そんなことを訊く。
「イった……んだと思う。……多分」
　飄次郎がそう答える。
　詩織は、はっきりしない顔で、それでも何か考え込んでるようだったが、不意に、にっこりと微笑んだ。
　そして、飄次郎の胸に、すりすりと頬をすり寄せる。
「嬉しい……」
「嬉しい？」
　やや予想外の言葉に、飄次郎が聞き返す。
「だ、だって……大好きな飄次郎さんと、えと、エ、エッチなことして……それであんなに気持ちよかったんだもん……すごく、嬉しいです……」
「そう、か……」
　飄次郎は、うまい言葉をみつけられず、そんなふうに返事をした。
「好きな人とのセックスって……きもちいいんですね……」
「……」
　飄次郎には、うまく答えられない。
　と、まるで代わりに返事をするかのように、飄次郎の腹が、盛大に鳴った。
「んふっ……」
　詩織が、たまらず吹き出す。
「んぷっ、くふふふふふっ。そ、それに、セックスって、おなか空きますねえ」
「いや、それは……」
　飄次郎は、初心な少年のように、真っ赤に顔を染めた。
「夕食前ですもんね。あたし、すぐ、準備しますね」
　そう言って、詩織はベッドから降りようとして――

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「きゃ！」
　腰に力がはいらなかったのか、そのまま、すってーん、と転んでしまった。
「……」
「……」
　ベッドの上の飄次郎と、カーペットの上の詩織が、見詰め合う。
　そして二人は、全ての緊張から解放されたように、声を出して笑いあった。

「ちょ、ちょっと緑郎、どこ触ってンのよお！」
「ランちゃんのふとももも♪」
「こらバカこのスケベ！」
「暴れちゃダメだってば……んげ！」
　ランの後蹴りを脇腹に受け、その背後にしゃがみこんでいた緑郎がつぶれたカエルのような声をあげた。
「もう、さっきからべたべたべたべた触るばっかりでえ！」
　ランが、怒髪天、といった勢いで叫ぶ。
「ぜんぜん手錠外れないじゃないかあ！」
「だってさー、こう暗いと、手元がよく見えなくて……」
　緑郎は、その柔らかそうな鳶色の髪を、持っている針金でこりこりと掻いた。
　ここは、外灯もまばらな山道に隣接する、ちょっとしたオートキャンプ場である。
　と言っても、車を止めるスペースと、水道、それと簡単な作りのトイレがあるだけの場所だ。冬場は止められている水道の栓を、緑郎は、平気な顔で開いてしまっている。
　車は、すでに乗り換えていた。メタリックグリーンのワンボックスワゴンである。緑郎が、都内の駐車場に抜け目なく準備していたものだ。
　そして、しつこく追いすがる追手をまいて、ここまで逃げてきたのである。
　日は、とっぷりと暮れていた。明かりはランプの形をした電灯のみである。
　二人の脇で、携帯コンロが、鍋の中のお湯を沸かしていた。
「何が、オレの手にかかればこんなチンケな手錠なんてちょちょいのちょい、よお！　まったく、口ばっかなんだから！」
「よくまあそんな正確に憶えてるねえ」
「とにかく――」
　ここで、ランは、ふと、口をつぐんだ。
「どしたの？」
　緑郎が、心配そうに声をかける。
「おなか、すいたァ……」

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

　そう言ってランは、後手に両手を手錠で戒められたまま、ぺたん、と座りこんだ。

「はい、あーん」
「だからあ、いちいちンな恥ずかしいこと言うなあ！」
　そう言ってから、両手を拘束されたままのランは、不承不承、口を開けた。
　その口に、プラスチックのスプーンで、緑郎はカレーライスを運ぶ。ルーも、米も、両方ともレトルトだ。
「ま、キャンプといえばカレーだからね」
　口をむぐむぐさせているランに、緑郎がそんなことを言う。
　そして、手に持ったスプーンで、自分のカレーをすくおうとする。
「間接キス禁止！」
　ランが、叫ぶように言う。
「はいはい」
　緑郎は、ちょっと悲しそうな笑みを浮かべて、そう返事をした。

「ようやく外れたぁー」
　ふう、と息をついて、緑郎が天を仰ぐ。
　夜空は、満天の星だ。都会ではまず確認できない天の川を、肉眼で見ることができる。
「緑郎」
　手首をさすりながら、ランが、言う。
「何？」
「ありがと……」
「うん」
　頬を少し赤く染めながら言うランに、緑郎はにっこりと笑いかけた。
「あのさ……緑郎って、どんな人なの……？」
「どんなって？」
「だからさ、職業とか、普段何してるかとか……」
「ただの、フリーの情報屋だよん」
　涼しい顔で、緑郎が答える。
「お金と時間さえあれば、どんな情報でも手に入れて見せる、ね」
「でも、それだけじゃないんでしょ」
　緑郎の手の中の銀色の手錠を見ながら、ランが訊く。
「ま、ね。新聞や雑誌の記事書くこともあるし、探偵もやったことあるなあ」
「探偵？」
「うん。他にも、薬屋さんとか、カメラマンとか、学校の用務員とか、コンビニ店員とか、ゴミ収集業者とか、ドロボーとか……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「ふうん……」
「でも、ランちゃんを助けたのは、仕事じゃないよ」
「え？」
　ランが、緑郎の言葉に、その眼鏡の奥の目を見開いた。
「どういうこと？」
「商売抜きで、好きでやったこと♪」
　そう言いながら、緑郎は、ワゴンの後部座席を倒して、寝袋を二つ用意する。
「じゃ、ランちゃんは車の中ね」
「え、緑郎は？」
「オレは、車の外でいいよ」
「だって……寒いよ。こごえちゃうよお」
「大丈夫、慣れてるから」
　屈託のない顔で、緑郎が言う。
「そんな……」
　しばらく黙ってから、ランは、ぽつん、と言った。
「いいよ。車の中で、一緒に寝ても」
「あ、ホント？」
　緑郎は、ランが拍子抜けするほど、あっさりとそう言った。
　そして、よいしょ、と声をあげながら、さっさとワゴンの中に入ってしまう。
「緑郎……」
　呆れたような顔で、ランが言う。
「何？」
「――朝使ってたスタンガン、貸して」
「ありゃりゃ、やっぱ信用ないなあ」
　苦笑いしながら、緑郎は、ランにスタンガンを手渡した。

「あの娘を取り逃がしましたか……不手際が目立ちますね、教授」
　真夜中、部屋の応接セットのソファーに座りながら、狗堂が言った。
「大きなお世話だ」
　“教授”が、デスクに座ったまま、答える。
「中佐は、どうしました？」
「知らん」
　“教授”の言葉に、狗堂は、くすくすと笑った。
　人の神経を逆撫でするような、いつもの笑みだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　その綺麗なアーモンド型の目は、しかし、少しも笑っていない。
「犬神村に、部隊を派遣されたそうですね」
　狗堂の言葉に、“ 教授 ” の眉がぴくりと跳ねた。
「ようやく、上からの許可が下りたというところですか」
「……」
　“ 教授 ” の額に、脂ぎった汗が浮かぶ。
　その右手は、狗堂から見えないように、ゆっくりと引出しの中をまさぐっていた。
　そして、軍用である大口径の自動拳銃を、しっかりと握り締める。
　“ 教授 ” は、自分の射撃の腕前に自信を持っていた。その歪んだ性癖を満足させるために、合衆国軍施設の敷地で、人間狩りをしたこともある。
　金で買い取った途上国の子供を追い詰め、射殺する、悪魔の愉悦だ。
　応接セットからデスクまでは、距離がある。
　いかに狗堂の運動能力が優れていても、自分の許に到達する前に頭部に銃弾を叩きこむは、充分に可能だ。
　弾は、国際法で対人使用が禁止されている、いわゆるダムダム弾である。ジャケットの一部を切り欠いて弾芯を露出させた弾頭で、命中すれば、その部位は原形をとどめぬまでに破壊されるはずだ。
「中佐が、部隊を率いて犬神村に赴いたということは……」
「……」
「いよいよ僕は用済みということですね」
　狗堂の言葉が終わるより早く、“ 教授 ” は銃を構えていた。
　しかし、“ 教授 ” の視界が何かに塞がれる方が、もっと早い。
「――ッ？」
　完全防音の室内で、拳銃の発射音が響いた。
　分厚い木の板が、“ 教授 ” の顔にまともにぶつかる。
　“ 教授 ” は、声をあげることもできずに、座っていた椅子ごと後に転倒していた。
　それは、応接セットのテーブルだった。
　狗堂が、黒檀でできた重いテーブルを、何の予備動作もなく、片手で放り投げたのである。
「ぐえ！」
　狗堂の左足が、倒れた “ 教授 ” の喉を踏みつけた。
　右足は、拳銃を握ったままの “ 教授 ” の右手を踏み砕いている。
　“ 教授 ” の顔は、額が割れ、血まみれだ。その目は、眼球がこぼれ落ちんほどに見開かれ、口は、空気を求めてぱくぱくと開閉されている。
　叫ぼうとしても、“ 教授 ” は叫ぶことができない。
　左手が、空しく宙でじたばたと踊っている。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「自分の喉の潰れる音を聞きながら、死んでください」
　そう言って、狗堂は、左足に体重をかけた。
　ごりっ――という頚椎の砕ける嫌な音に、狗堂が笑みを浮かべる。
　“教授”は、顔を紫色に染めながら、絶命した。
　と、ドアの外から、慌しく叫ぶ声と靴音が響く。
　“教授”付きのボディガードが、ようやくたどり着いたのだろう。
「ふっ……」
　狗堂は、殺戮の予感に、その唇に浮かぶ笑みをますます強烈なものにしていった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

－第四章－

　空色のトレーナーにエプロン姿の詩織が、にこにこしながらそう言って、食後のお茶を淹れる。
　ほうじ茶独特の芳香が、敏感な飄次郎の嗅覚をくすぐった。
　夕食の準備にとりかかるのが遅かったため、もう、夜もすっかりふけている。
　窓の外はしんしんと冷えているのだろうが、部屋の中は、ひどく暖かだった。
「はい、どーぞ」
「あ、すまん」
　そう言って茶碗を受け取りながら、飄次郎は、奇妙な違和感を憶えていた。
　血の掟を破り、もはや村に帰る資格を失ったというのに、奇妙なほどに心が和んでいる。
　いや、村に帰れないどころか、狗堂ともども、別の追手に命を狙われることだってありうるのだ。
　それでも、飄次郎の胸に、後悔の念は微塵もない。
　飄次郎は、まるで何年も前からこうしていたかのように、穏やかな気持ちでほうじ茶をすすった。
　妹のランのことを考えると、すこし気が重くなるものの、話せばきちんと分かってくれると、飄次郎は信じている。
「あの、飄次郎さん」
　と、詩織が、コタツの向こうから上目遣いで飄次郎のことを見つめながら、話しかけた。
　例の、小悪魔じみていると言うにはやや弱気な、親に何かをねだる童女のような顔である。
「ん？」
「まさか今夜は、こっちで寝たりしませんよね？」
「……」
　詩織の言葉に、飄次郎は、不覚にも頬が熱くなるのを感じていた。
　そんな飄次郎に、詩織が、くすっ、と笑いかける。
「あたしのベッド……けっこう、おっきかったでしょ？」
　そして詩織は、そんなことを、言うのだった。

「……ったく、拍子抜けだな」
　ぽつん、と飄次郎はつぶやいた。
　その唇には、苦笑いが浮かんでいる。
　詩織の部屋の、ベッドの中。部屋中に飾られているぬいぐるみの顔が、常夜灯の光の中ぼんやりと見える。

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

詩織は、飄次郎の腕枕に頭を乗せ、くーくーと可愛らしい寝息を立てて眠っていた。
「疲れてたんだな、こいつ……」
そう言って、そっと、詩織の寝顔を見る。
父親に抱かれた子供のような、安心しきった顔だ。
温かい体温を、間近に感じる。
飄次郎は、詩織の体に、腕枕にしていないほうの手できちんと布団をかけなおし、そして目を閉じた。

時に忘れ去られたような、小さな集落。
深い谷間にある村である。
そこに、あまりにも場違いな侵入者が現れたのは、その日の未明のことだった。
雪原用の、白と灰色の迷彩服を着た、総勢三十人ほどの、屈強の男たち。
その手には、特殊部隊用の軍用銃であるＭ４カービンが構えられている。
村の住人たちは、まだ夜も明けきらぬうちに、この無礼な異国の兵士たちによって、集落の中心にある広場に集められていた。
「これで全員か？」
部隊を率いる“中佐”の問いに、兵士のうち一人が肯いた。
広場に集められた住人たちは、三十人に満たない。いかに村の規模が小さいとはいえ、戸数に比べて少なすぎる。
その上、そこにいるのは壮年や老人ばかりだった。一番若い者でも、五十歳を超えていると思われる。
若者は、一人もいない。
「どういうことですかな、これは」
“中佐”は、言葉使いだけは丁寧に、村の住人に言った。
住人の代表格らしい、白髪の老人が、一歩、“中佐”の方に歩み出る。
その顔には深く皺が刻まれ、背中も曲がっていた。しかし、その瞳には、炯々とした光が未だ宿っている。
「どういうこととは、そもそもこちらの台詞じゃな」
老人は、意外なほど張りのある声で、そう言った。
「ずいぶんと物騒ななりで、こんな辺ぴな所までご苦労なことじゃが……招いた覚えはないぞ」
「立場がお分かりでないようだな、ご老人」
そう言って、“中佐”は、外国銘柄の煙草を咥え、火を点けた。
「この村でこれから起こることについては、この国の政府は、見て見ぬふりをすることに

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

なってるのですよ。高度に政治的な判断が働いてね」
　倣岸な態度で煙を吐きながら、“ 中佐 ” は言った。
「勿論、我々も手荒なことをしたいと思っているわけではない。後始末が面倒ですからな。しかし、必要とあれば、それをためらうようなことはありませんぞ」
「……」
　老人が、無言で、くしゃっと顔を歪めた。その表情の変化に、“ 中佐 ” が眉を寄せる。
　それは――嘲笑だった。
　老人だけではない。そこにいる村人たちは、一様に、自分たちを囲む兵士たちを嗤っていたのだ。
「何が可笑しい？」
　“ 中佐 ” が苛立たしげに訊く。
　老人は答えない。
　“ 中佐 ” が、拳銃を取り出した。
「実験台は、一人いれば充分だ」
　“ 中佐 ” が、誰に言うでもなく、言った。
「それも、若ければ若いほどいい。ここにいる全員を掃除して、どこかに隠れている子ネズミどもを探すという手もあるのですぞ」
「……あんたらの、その鉄砲な、ちょいとばかり匂いがきつすぎじゃ」
　老人が、黄色い歯を剥き出しにしながら、言った。
「逃げ隠れするどころか、いろいろと準備する時間を頂いたわい」
「準備……？」
　そう、“ 中佐 ” が聞き返した時――
　遠くから、どおん、という鈍い音が、響いた。

「！」
　不吉な夢に、飄次郎は、布団を跳ね飛ばすような勢いで状態を起こした。
「んにゅ〜？」
　抱き枕の要領で飄次郎の胴に腕を回していた詩織が、奇妙な声をあげる。
　冬の朝日は、まだ昇りきっていない。カーテンの隙間からのぞく風景は、いかにも寒そうだ。
「あっ……お、おはようございますぅ……」
　詩織はそう言いながら、ごしごしと目をこすり、乱れたショートカットを両手で撫でつけた。
「えと……どうか、しました？」

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして、じっと押し黙ってる飄次郎の顔を、覗き込む。
「いや……なんでもない……」
はっきりと胸騒ぎを感じながらも、飄次郎は、そう答えた。
「……」
詩織は、何か言いかけて、やめた。
そして、寂しそうに笑って、ベッドを降り、カーテンを空ける。
ちょうど、この日の初めての日の光が、地面に届いたところだった。
「飄次郎さん……」
まぶしいほどの朝日に照らされた、向かいの家の屋根を眺めながら、詩織が言った。
「今日、出てっちゃうんですか？」
「……そうだな」
パステルブルーのパジャマを着たままの詩織の小さな背中を見ながら、飄次郎が言う。
「お前の母親も帰ってくるだろうし……今日は月曜だろ？　学校に行かなきゃいけないんじゃないのか？」
「学校かア……」
くすっ、と少し笑いながら、詩織は振り向いた。
「ヘンですね……あたし、昨夜は、学校のことなんか全然忘れてました」
「……」
「学校のことだけじゃなくて、お母さんのことも……今までの生活のことも、ぜんぶ」
「詩織……」
「そんな顔しないでくださいよォ」
そう言う詩織の声は、飄次郎が拍子抜けするくらいに、明るかった。
「あたし、飄次郎さんに会えて……それから、その、ああいうことになって……すごく嬉しかったです。本当に」
「そう、か……？」
「はい」
迷いのない口調で、詩織がそう返事をする。
「もし、もしこれで、飄次郎さんとお別れになって……ずっと会えなくなっても……あたし、絶対に後悔なんかしませんよ」
「……」
飄次郎には、言うべき言葉が見つからなかった。
こういう時に、気の利いたこと一ついえない自分が、いかにも馬鹿に思える。
例えば緑郎なら、こういうときにどう言うのか、そんなことを思ってしまう。
「でも……」
詩織の言葉に、知らず知らずのうちにうつむいていた飄次郎は、はっと顔を上げた。
「でも、ホントは……やっぱり、お別れなんて、イヤです……」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そう言う詩織の大きな瞳が、涙で潤んでいる。
「飄次郎さんを困らせたくないし……いつまでも甘えんぼじゃ、いけないと思うんですけど……」
　声を詰まらせながらそう言い、詩織が、ぐい、と溢れた涙を小さな拳でぬぐう。
　そして、真っ直ぐに飄次郎の顔を見て、続けた。
「もし、よかったら……携帯の番号とか、教えてくれませんか？」

　昼前の街を歩きながら、飄次郎は、溜息をついていた。
　朝食を一緒に食べた後、詩織とは、彼女の家の玄関前で別れた。
　制服のブレザーに着替えた詩織は、今ごろ、学校で教室の中にいるはずである。
　そして自分は、あてもなく、この街をさ迷っている。
　いや、あてならある。狗堂が出入りしているという大学の研究所。そこに行けば、狗堂に関する手がかりがつかめるはずだ。
　しかし、自分に狗堂を追う資格があるのか。
　もはや自分は、血族の掟を破っているのだ。狗堂の追手を務める資格はない。
　そもそも、このように乱れた心で狗堂と対峙して、どれほどのことができるのか。
（詩織……）
　飄次郎は、乱れた心の中心にいる少女の名を、そっと胸のうちでつぶやいた。
　詩織に教えた番号は、プリペイド式の携帯電話のものである。そもそも飄次郎は、きちんと携帯電話の契約ができるような身分ではない。
　いずれ、詩織から電話があっても、自分は受け取ることができなくなるのだ。
　そのことは詩織には言っていない。
　そのことに気づいたとき、詩織はどう思うのだろうか。
　自分が憎まれ、恨まれるとしても、それは当然のことだ。しかし、もし詩織がそれで傷付き、悲しむことがあるかもしれないと思うと、それだけでどうしようもないほどに胸がざわめいてしまう。
（どうしちまったんだ、俺は……）
　駅に向かうまばらな通行人とすれ違いながら、飄次郎は思った。
（それに……俺に何ができる……？　あいつの傍にいてやることができるのか……？）
　飄次郎が、その拳を、関節が白くなるほどに強く握り締める。
　その時、携帯が鳴った。
「？」
　通話ボタンを押しながら、一瞬、詩織かと思ったが、すぐに緑郎だろうと思い直す。
　しかし、携帯から聞こえてくる声は、そのどちらのものでもなかった。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「飄次郎かい？」
　どこか笑みを含んでいるような、聞き覚えのある男の声。
「狗堂？」
「ご名答」
　狗堂が、くすくすと神経に障る笑い声を立てる。
「なぜ、この番号が……」
「どうしてだと思う？」
　立ちすくむ飄次郎を揶揄するように、通話口の向こう側の狗堂が、そんなふうに訊く。
「まさか……」
「この娘の携帯には、飄次郎さん、って登録されてたよ。可愛らしいもんだね」
「貴様――詩織に何をした？」
　噛みつくような勢いで、飄次郎が言う。
「とりあえず眠ってもらってるよ。しかし、ずいぶんと慌ててるね」
「狗堂……」
「もしかして――僕と兄弟になったのかな？」
　びきっ、と飄次郎の持つ携帯電話が、悲鳴をあげた。そのボディに、亀裂が入っている。
「落ち付きなよ、飄次郎」
「……」
「僕は、今、この街の再開発地区の埋立地に向かってる。この娘も連れてね。そこで決着をつけようじゃないか」
「決着、だと……？」
「ああ。もう僕は、逃げるのにも囲われるのにもうんざりなのさ。自由、とにかく自由がほしいんだよ」
　歌うような調子で、狗堂が言う。
「分かった……俺が行くまで、詩織には手を出すなよ」
「怖いなあ」
　くすっ、という笑い声を残して、狗堂が電話を切る。
　その時には、飄次郎は、一陣の風のように疾走していた。

　海に面した、再開発地区。
　古い、放棄された幾つもの倉庫が立ち並ぶ地域に、新しい埋立地が隣接している。
　そんな中の、土砂の山があちこちにある埋めたて現場に、飄次郎はたどり着いた。
　こんな場所に不釣合いな黒塗りの車が、道路に面する広場に停められている。狗堂が乗り捨てたものらしいが、中は、もぬけのからだ。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

飄次郎は、心持ち上を向き、目を閉じて、大気の匂いを嗅いだ。
そして、迷いなく、埋立地の奥へと歩を進めていった。
土砂の山の間や、プレハブの飯場の脇をすり抜ける。
作業が中断しているのか、人の姿は見えない。置き忘れられたかのように停まっているダンプは、もう何ヶ月もそのままでいたように、ほこりまみれになっている。
そのダンプの蔭に、白いジャケット姿の狗堂がいた。どういうつもりか、その右の耳に、イヤフォンをはめている。
そして、狗堂の足元に、詩織が横たわっていた。
「狗堂……」
相変わらず、歪んだ笑みを浮かべているその秀麗な顔を目にし、飄次郎は唸るような声をあげた。
「久しぶり……でもないか。ついこないだ会ったばかりだもんね」
「どういうつもりだ？」
「言ったろう。もう、逃げ回るのにはうんざりなのさ。それに今日は、決着を付けるにはちょうど潮時だからね」
「潮時？」
聞き返す飄次郎に、狗堂は肯いて見せ、そして言った。
「村の場所が、世間に知られたんだよ」
「――！」
飄次郎が、その一重の目を見開く。
「かねてからの約定通り、村は、決断を下したよ。血族の掟に従ってね」
そう言って、狗堂は、ポケットからラジオを取り出した。そして、耳からイヤフォンを外し、ジャックを抜く。
ラジオが、そのスピーカーからニュースらしき音声を流した。
――県大狛郡犬伏谷付近で、大規模な雪崩があった模様です。雪崩は、谷合にあった集落を直撃したとの情報も入っておりますが、被害についてはまだ詳しいことは分かっておりません。なお、県は自衛隊に出動を要請し……
「存在しないはずの村が潰れたにしては、素早い報道だね」
言いながら、狗堂は、ラジオのスイッチを切り、地面に放り投げた。
「貴様――貴様が、村を売ったのか？」
飄次郎の目は赤く血走り、その全身は、激情に細かく震えている。
「何を怒ってるんだい？　飄次郎だって、掟を破った仲間だろう？」
「違う！　俺は――」
「違うもんか」
狗堂が、ますますその笑みを歪める。
「お前も、外に出て分かったろう？　外にはあらゆるものがあり、あの村には、淀んだ血

Neon PDF Driver Trial
www.neon.com.tw

があるだけだった。そして姉さんは、その淀んで腐った血に溺れて死んだ。いや、殺されたんだ」
「暁子さんのことは――」
「捕まって村に連れ戻された姉さんがどんな目にあったか、お前は知ってるかい？　蔵の中に閉じ込められ、来る日も来る日も、血族の子を孕むまで、男衆に犯されて……姉さんを犯した男の中には、お前の父親もいたんだよ」
「……」
「首を吊った姉さんのお腹の中にいたのは、お前の弟か妹だったかもしれないのさ」
「だから――詩織を犯したのか？」
　飄次郎が、打って変わって静かな声で、言った。
「それじゃあ、結局は村の男衆と同じだ。お前こそ、血族の血に捕われてるんじゃないのか？」
「……」
　狗堂の顔から、笑みが消える。
　飄次郎は続けた。
「――確かに俺は、お前と同じように、掟を破った。だが、俺は、お前とは違う。俺がお前を許すことができないのも、そのせいだ」
「なるほどね……」
　そう、狗堂が言った、その時――
「！」
　飄次郎は、別の人間の気配に、振り向いた。
「れぁあああああああああああああッ！」
　奇妙な声をあげながら、体の大きな男が、どん、と飄次郎にぶつかる。
「ちッ！」
　舌打ちしながら飄次郎が右腕を払うと、男の巨体が、まるでゴムまりのように弾け飛んだ。
　地面に倒れたときには、男は白目をむいていた。砕けた下顎が、まるで冗談のように真横にずれ、白い歯の混じった鮮血が、口の端からこぼれている。
　詩織に付きまとっていた、あの多田原という男だ。
　油断だった。狗堂と詩織に気を取られ、多田原の匂いに気付かなかったのである。
「く……」
　小さくうめく飄次郎の右の脇腹に、深々とナイフが突き立っている。
「つまんない恨みを買ってたようだねえ、飄次郎」
　くすくすと笑いながら、狗堂が言う。しかし、飄次郎を見つめるその目は、少しも笑っていない。
「お前が、呼んだのか？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「まあねえ。あの店での一件は、けっこう大学でも噂になっててね。たまたま知り合ったから、声をかけたわけさ」
「……」
　飄次郎が、尖った犬歯を剥き出しにして、歯噛みする。
「あまり期待はしていなかったけど、けっこうやってくれたね」
　飄次郎は、無言で、その、ぞっとするような刃渡りのナイフを引き抜いた。
　鮮血が溢れ、そして、すぐに血が止まってしまう。収縮した筋肉が、出血を止めたのだ。
　しかし、この状態では、致命的に動きが遅くなる。とは言え、体内に異物がある状態よりはマシだ。
「おおおっ！」
　飄次郎は、右手に握ったナイフを狗堂に投げつけ、そして、地を蹴った。
　飄次郎の顔が、瞬時に、狼のそれに変わっている。
　疾風の如き飄次郎の走りは、しかし、傷のために、わずかに精彩を欠いていた。
　ぎん、と鋭い音が響く。
　狗堂が、懐から取り出したもので、ナイフを弾いたのである。
　そして、拳銃の発射音が、無人の埋立地に響いた。
「Gah！」
　飄次郎の体が、地面に転がった。
　その右の腿の肉が爆ぜ、まるで割れた石榴のようになっている。
「腹を狙ったはずなんだけど、なかなか当たらないものだねえ」
　そう言う狗堂の右手には、銃口から硝煙をあげる軍用拳銃が握られていた。“教授”の使っていた品だ。
　そして、再び銃声。
　必死で地面を転がった飄次郎の左足を、銃弾が貫通する。
「Guuuuuuu……」
　両足を殺され、飄次郎は、立つこともままならない。
　四つん這いに近い姿勢で、両手を地面につき、狼そのものの眼を、狗堂に向けている。
「今度こそ、頭だよ」
　嬲るような口調でそう言いながら、狗堂が、ゆっくりと飄次郎に近付いた。
　致命的な一撃を確実に与えるために、外しようのない距離にまで歩を進めていく。
　狗堂は、飄次郎の間合いの寸前で、歩みを止めた。
　そして、右手一本で軽々と拳銃を構える。
　まだ熱い銃口が、飄次郎の額を捕えた。
　覚悟を決めたように、一瞬、飄次郎がうなだれる。
　そして――
　飄次郎が、傷付いた両足で、跳躍した。

Xeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

狗堂の目論見をはるかに超える飛距離だ。
鋭い爪を伸ばした右手の手刀が、信じられないような速度で、狗堂の喉笛を狙う。
轟音とともに発射された銃弾が、飄次郎の右腕をえぐった。
飄次郎の手刀の一撃が大きく反れる。
代わって首筋に迫る飄次郎の牙を、狗堂は、間一髪、体を反らしてよけた――
はずだった。
「！」
まるで、笛の音のような音とともに、ぱあっ、と真紅の鮮血が高く宙を舞った。
飄次郎と狗堂の体が、ほとんど同時に、地面に倒れる。
狗堂は、驚愕の表情のまま、天を睨んでいた。
その首は半ば以上切断され、脳に供給されるはずだった大量の動脈血が、空しく地面にこぼれていく。
狗堂の体が、今まさに消えつつある本人の意志とは無関係に痙攣し……やがて、それも止まった。
静寂が、辺りを支配する。
しばらくして、ゆっくりと、飄次郎は立ちあがった。
その動きはひどくぎこちなく、両足の傷はまだ塞がりきっていない。が、出血はほとんどなくなっている。
そして、その口には、多田原のナイフが咥えられていた。
飄次郎は、わざとこのナイフのある方向に地面を転がったのだ。
そして、飄次郎が口に咥えたこのナイフの分、狗堂は、間合いを見誤ったのである。
飄次郎は、ナイフを地面に吐き捨て――そして、餓えた獣そのままに血走った目を、気絶したままの詩織に向けた。

「ん……」
奇妙な息苦しさを覚えながら、詩織は、ぼんやりと目を開いた。
登校途中、何者かに首の後を殴られて以来の記憶が、無くなっている。
「え……？」
薄暗い視界の焦点が、次第に合っていく。
「きゃ……！」
詩織は、悲鳴をあげかけたまま、硬直していた。
全身に獣毛を生やした何者かが、自分にのしかかっていたのだ。
その暗灰色の頭は、まさしく狼のそれである。
ぎらぎらと欲望に光る二つの眼が、自分を見下ろしていた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

牙を生やした口が、すぐそばから生温かい息を吐きかけている。
詩織は、恐怖に目を見開いていた。
あまりのことに、頭がパニックになりそうになる。
と、その時、詩織は、今まで忘れていたある感覚を思い出していた。
犯され、処女を失って以来、無くしていた感覚――
「――ひょ、飄次郎、さん？」
思わず、詩織はそう呼びかけていた。
目の前の怪物が、びくっ、と体を震わせる。
「やっぱり、そうなんですか？　え、でも……なんで、そんな風に……？　それに、ここどこ？」
言いながら、詩織は、辺りを見まわした。
ほこりっぽい、プレハブ製の倉庫の中のような場所だ。
自分は、まだブレザーを着ている。そして、目の前の何者か――飄次郎の着ている服は、ぼろぼろだった。
そして、割り広げられた詩織の脚に触れているその股間が、熱く、脈打っているのが感じられる。
「え、えと……」
詩織は、この異常なシチュエーションにもかかわらず、自分の頬が上気しているのに気付いていた。
「あの……飄次郎さん、なんですよね？」
問いかける詩織に、それは、こっくりと肯いた。
「飄次郎さんて、えっと……狼男、だったんですか……」
そんなことを言いながら、詩織は、ちらちらと飄次郎の股間に視線をやってしまう。
痛々しいほどに膨らんだスラックスの奥にあるもののことを考えると、なぜか、それだけで胸がざわめいてしまう。
「飄次郎さん……えっと、その……したいん、ですか？」
そう言いながら、詩織は、飄次郎のその部分に、両手を伸ばした。
飄次郎は、獣がうなるような声で、返事をする。
無論、それがイエスなのかノーなのか、詩織には判然としない。しかし、目の前の飄次郎が、狂おしい情動に苛まれ、身悶えせんばかりになっていることだけは、はっきりと感じられた。
（なんだろう……何だか、夢の中みたいに、シュールな感じ……）
詩織は、混乱した頭で、そんなことを考えた。
（それに、飄次郎さん、オオカミの顔してるのに……あたし、もう全然こわくない……）
（やっぱ、これ、夢かなア……）
（あ、でも……飄次郎さんのココ……すごく熱くて……とくん、とくん、って、脈打って

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

て……）
（やだ、あたし……ヘン……体の奥が……うずうずしちゃってる……）
　詩織は、我知らず、すりすりと飄次郎のその部分を優しく撫でさすっていた。
　布地の奥で、熱い剛直が、さらに膨張したように感じられる。
　頬を赤く染めながら、詩織は、飄次郎のベルトを外し、スラックスのホックを外して、ファスナーを下ろした。
「えと……えっと……」
　そして、ごそごそと両手を動かし、トランクスから、飄次郎のそれを解放した。
　赤黒いペニスが、凶暴な角度で反り返る。
　詩織は、浅ましく静脈を浮かせたその牡器官を、小さな両手でそっと包みこむようにした。
　けして夢ではありえないリアルな質感が、手の平に感じられる。
　だが、もはや恐怖は感じない。
　飄次郎が、詩織の耳元で、はぁっ、はぁっ、はぁっ、はぁっ、と荒い呼吸を繰り返している。
　恐らく、身を焼くような欲望に必死で耐えているのだろう。
　それを、飄次郎は、凄まじいばかりの自制心でこらえ、自分を傷付けまいとしているのだ。
　詩織には、それが、痛いほどに伝わった。
「飄次郎さん……」
　詩織は、はしたなくも自らスカートをまくりあげた。
　そして、ショーツの布地をずらし、自身の秘裂を露わにする。
「いいですよ、飄次郎さん……あたしを、好きにしてください……」
　そう言って、熱くたぎるペニスを、まだ濡れていないクレヴァスにあてがう。
　ぐっ、と飄次郎が、腰を進めた。
「んくッ……！」
　先端で入口をえぐられただけで、激痛があった。
　抑えようとしていた悲鳴が漏れてしまう。
　詩織は、ぎゅっ、とめくりあげたスカートを握り締めた。
「Urrrrrrr……」
　飄次郎が、苦しげに唸りながら、身を引いた。
「ひょ、飄次郎、さん……？」
　上体を起こし、茫然と、詩織が呟く。
　と、その詩織の脚の間に、飄次郎の狼頭が差し込まれた。
「きゃっ！」
　噛み付かれるのではないかという原初的な恐怖が、一瞬だけ蘇る。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

飄次郎が、その長い舌で、詩織のそこをぞろりと舐めあげた。
「ひゃう……っ」
熱く、ざらついた舌が、繊細なラビアを舐めしゃぶる。
けして自分に苦痛を与えまいとする飄次郎の気持ちが、詩織には、泣きたいほどに嬉しかった。
「飄次郎さん……っ！」
無理な態勢から、詩織が、飄次郎の胴に抱きつこうとする。
いつしか、自然と、いわゆるシックスナインの態勢になっていた。
下になり、飄次郎の引き締まった腹部に腕を回す詩織のおでこに、こつん、と飄次郎の亀頭が触れる。
「あぁ……」
詩織は、熱い吐息を漏らしながら、その飄次郎のペニスの裏側に、ちゅっ、とキスをした。
そして、自分のその部分を舌で愛撫してくれることへのお返しのつもりで、れろん、れろん、と裏筋に舌を這わせる。
自分の舌の動きに、ひくひくと震える飄次郎のペニスが、何だか愛しかった。
「あむ……」
耳年増な級友たちが話していた“オトコを悦ばせる方法”を思い出しながら、詩織は、ひくつくペニスの先端を、その小さな口に咥えた。
口腔いっぱいに、強烈な牡の匂いが感じられる。
しかし、それも、飄次郎の匂いだと思うと、不思議と嫌悪感は湧かなかった。
そのまま、どうしていいかわからず、とりあえず、はむはむと口を動かしてみる。
「Uh……」
自分の足の間で、飄次郎が唸った。
そして、ますます熱心に、その舌で、詩織のクレヴァスをえぐる。
大陰唇と小陰唇の狭間を舐めしゃぶり、尖らせた舌先を、膣口に差し入れた。
思わず詩織は、さらなるクンニリングスをねだるように、はしたなくも腰をゆらゆらと動かしてしまう。
そして、ふうン、ふうン、と媚びるような鼻声を漏らしながら、口腔内のペニスに、舌を絡めた。
そのフェラチオのテクニックは、いかにもぎこちないが、相手に感じてほしいという純粋な思慕が現れている。
詩織は、飄次郎のペニスがぴくぴくと快楽の反応を示す場所を覚えると、そこを重点的に舌と唇で愛撫した。
ペニスの先端の鈴口や、雁首のくびれた辺り、そして縫い目のような裏筋に、献身的に下と唇を這わせる。

Neon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

唾液が、口の端から溢れ、飄次郎の漏らした先走りの液とともに、無残にも詩織の童顔を汚した。
一方、詩織のクレヴァスも、飄次郎の激しい愛撫に、恥ずかしいほどに蜜を溢れさせている。
飄次郎は、詩織のその部分を愛撫しながら、滑稽なくらい丁寧にショーツとスカートを脱がしていた。詩織も、その度に腰を浮かせて、飄次郎に協力した。
そして、とろとろと会陰を伝う愛液を、その長い舌で舐めしゃぶる。
いつしか、詩織のクレヴァスは、咲きかけた南洋の花のようにほころび、物欲しげにひくひくと息づいていた。
「ひょ、飄次郎さぁん……あたし……あたしもう……」
詩織が、鼻にかかった甘え声で言う。
飄次郎が、口から愛液の糸を引きながら、上体を起こした。
と、下半身剥き出しの詩織が、片時でも飄次郎と離れたくない、といった感じで、獣毛を生やした飄次郎の胸にすがりつく。
自然と、対面座位の形になった。
「飄次郎さん……」
詩織が、そう呼びかけながら、とろんとした目で、変わり果てた飄次郎の顔を見つめる。
その瞳は、間違い無く飄次郎のそれだ。
「飄次郎さぁん……」
詩織が、自身の腰を、飄次郎の腰に押しつけるようにした。
完全に勃起した飄次郎のペニスの裏側が、愛液に濡れた詩織のクレヴァスと、ぬるぬるとこすれ合う。
「えと……ン……こ、こうかな……」
思わずとってしまった初めての体位に、詩織が、くにくにと可愛らしくヒップを動かしながら、挿入を試みる。
そんな詩織の細い腰を、ぐっ、と飄次郎の両手が抱えた。
詩織の体を軽々と浮かして、ペニスの先端を、熱くとろける靡肉にあてがう。
そして、飄次郎は、ゆっくりと詩織の腰を落としていった。
「あ、あああアア……ひあっ！」
対面座位で、突き上げられるようにペニスに貫かれる感覚に、詩織は、白い喉をのけぞらせて、声をあげた。
逞しい飄次郎の雁首が、詩織の膣肉をずりずりとこすりあげる。
「す、すごい……まだ……まだ入ってくる……ンあぁぁ……ん」
ようやく、飄次郎の長大なペニスが、詩織の小さな膣内に収まった。
詩織が、はぁはぁと切なげに息を漏らしながら、飄次郎の顔を見つめる。
そして、うっとりと目を閉じて、狼そのままの鼻面に、ちゅっ、とキスをした。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

とまどったように、飄次郎が目を見開く。
「んふっ……鼻のあたま……濡れてますね……」
そんなことを言ってから、詩織は、おっかなびっくりといった感じで、そろそろと腰を動かした。
「ン……んく……ふ……ふぅン……はン……」
詩織の白いお尻が、くいっ、くいっ、と淫らに動く。
「あ……はっ……き、きもち、イイ……」
ぴったりと隙間無く包みこんだ膣肉で、ペニスの感触を感じながら、詩織が、濡れた声を漏らす。
「Fuuuuuu……」
飄次郎が、その長い舌で、ぺちゃぺちゃと詩織の首筋を舐めまわす。
そして、左手でその華奢な体を支えながら、右手で、爪を立てないように詩織の乳房をまさぐる。
服の上からの愛撫に、紺色のブレザーがしわくちゃになるが、詩織は、一向に気にならない様子だ。
ブラのカップにこすれ、乳首が立っていくのが、自分でも分かる。
「あ……はぁっ……イイ……うん……きもち、イイです……っ」
飄次郎の頭をかき抱くようにしながら、詩織は、ますます大胆に腰を動かしていった。
最初はぎこちなかったその動きが、次第に滑らかになっていく。
「飄次郎さん……おねがい……じかに……じかにおっぱい、さわってください……」
そう言いながら、詩織は、ブレザーとブラウスのボタンを外した。
飄次郎が、詩織のブラをずらし、その意外と豊かな膨らみに手を這わせる。
「ひやあああああん♪」
尖った乳首を指の間で転がされ、詩織が、高い嬌声をあげた。
「あ……あっ、それ……きもちイイ……すごいぃ……っ！」
切なげに眉をたわめ、可憐な唇を半開きにしながら、詩織が恍惚の声をあげた。
つながった隙間からは、次々と白く濁った合い液が溢れ出ている。
「イイ……イイです……んんッ……んふン……ふあ……はぁ〜ン」
きゅうん、きゅうん、と膣道が収縮しているのが、自分でも感じられる。
と、飄次郎が、耐えきれなくなったように、詩織の小さな体をぎゅっと抱き締めた。
そして、ぐいぐいと詩織の体を動かし、ペニスを激しく抽送させる。
「ひあああああああッ！」
激しいピストンに、詩織は、思わず飄次郎の背中に爪を立てていた。
無論、そんなことでは、飄次郎の動きは止まらない。
「あ……はぐっ！　ンあああッ！　ス、スゴい！　スゴいよおっ！」
ぶちゅっ、ぶちゅっ、と淫らな水音が響く中、詩織が、高い声をあげる。

ZenPDF Driver Trial
www.zen.com.tw

結合部から溢れた愛液はしぶきとなり、倉庫の床を濡らした。
詩織は、まるで荒波に翻弄される小船のように、飄次郎の逞しい腕の中でがくがくと震えている。
「ひ！　あ！　ああ！　ンあああああッ！」
最初の絶頂が、詩織に訪れた。
びくびくびくっ！　とその小さな体が痙攣する。
しかし、飄次郎の動きは止まらない。
「ダ、ダメえ……ダメっ、ですゥ……あ、あたし、あたしぃ……」
ひいっ、ひいっ、というすすり泣くような声を漏らしながら、切れ切れに詩織が訴える。
飄次郎は、牙を食いしばりながら、身をよじる詩織の体を離そうとしない。
「ンあああああああッ！　あ！　また、またイクうううううううううッ！」
悲鳴をあげながら、詩織は二度目の絶頂を迎えた。
ぷしゃあああああっ、と、その股間から、小水が溢れる。
しかし、自らが失禁してしまったことにも、詩織は気付いていない様子だ。
ただ、絶頂の後も次々と訪れる快感の小爆発に、涙と涎を吹きこぼしながら、いやいやとかぶりをふるばかりだ。
それでいながら、その腕は、飄次郎の体をしっかりと抱き締めている。
「ひあああああああああああああああああああ！」
更なる快感の大波の予感に、詩織は、恐怖に近い感情を覚えた。
「あああッ！　もう……ダメ、ですぅ……あたし……あたし、おかしく、なるうッ！」
舌足らずな声でそう訴えながら、無意識に、きゅううううっ、と膣肉を収縮させる。
「おねがい……いっしょに……ひょうじろうさんも……いっしょにい……ッ！」
そう叫ぶように言う詩織の体を、一際深く飄次郎の剛直が貫いた。
「あぐッ！」
詩織が、その体を弓なりにのけぞらせる。
詩織の体の一番奥の部分で、熱い塊が弾けた。
「あッ！　あッ！　あッ！　あッ！　ンあああアーッ！」
びゅるるっ！　びゅるるっ！　びゅるるっ！　と、飄次郎のペニスが、何度も何度も律動する。
熱い精液が、自分の体内に注ぎこまれる感覚……。
薄れいく意識の中、詩織は、凄まじい快感とともに、牡を最後まで導けたという牝の満足感のようなものを、覚えていた。

Xeon PDF Driver Trial
www.xeon.com.tw

再び詩織が意識を取り戻したとき、小さな窓から、朱い夕日が差し込んでいた。
そんな中、あぐらをかいた飄次郎が、腕の中に詩織の体を抱えている。
その顔は、元の、鋭いながらもどこか少年の面影を残したそれに戻っていた。
詩織は、きちんと自分が服を着ているのに気付いた。
一瞬、全ては夢の出来事かと思う。
しかし、ブレザーやスカートはしわくちゃで、どこかほこりっぽい。何よりも、自分の秘めやかな部分に、行為の余韻がじわーんと残っている。
「悪い。ポケットティッシュで拭いただけだから……あ、ティッシュは、勝手にカバンから借りた」
飄次郎が、不思議そうな顔をしている詩織に、そんなことを言う。
「えと……飄次郎、さん？」
詩織は、飄次郎の顔に視線を戻しながら、おもわずその顔に手を伸ばしていた。
飄次郎の頬に、詩織の小さな手が触れる。
「えっと……」
「なぜ、俺だって分かったんだ？」
何か訊きたげな詩織の先を制するように、飄次郎が訊いた。
「あの……それは、なぜって言われると、困っちゃうんですけど……」
そう言いながら、詩織は、飄次郎の腕の中で、恥ずかしげに身じろぎした。ようやく気付いたように、飄次郎が、詩織を解放する。
名残惜しげに飄次郎の体から離れながら、詩織は、言葉を続けた。
「あたし、子供のころ、よくぬいぐるみとお話してたんです」
「……」
「あ、やっぱ引いちゃいます？　こういう話」
ぺろっ、と詩織がピンク色の舌を出す。
「いや……しかし、どうしてその話が……」
「えっと、だからですねえ……理屈じゃないんですよね。ぬいぐるみと話をするときも、そのコの名前とか、あたしが付けるんじゃないんですよ。ああ、このコの名前はなんとかだなあって、分かるんですね」
「それで……か？」
「ええ。だから、そのう……あは、ぜんぜん説明になりませんね、これ」
「要するに、俺は、ぬいぐるみと同じか」
「え？　えーっと……そう、なのかなあ」
詩織が、困ったような声でそう言う。
飄次郎は、苦笑に似た表情を浮かべ、立ちあがった。
そして、つられたように立ちあがろうとしてよろける詩織に、手を貸してやる。
「あ、すいません……」

Zen PDF Driver Trial
www.zen.com.tw

「いや……俺の方こそ、礼を言わないと」
　そう言う飄次郎に、詩織が、不思議そうな顔をする。
「事情は、落ちついてからきちんと話す。……お袋さんが帰ってくるのは、いつだ？」
「今日の、夜遅くだと思います」
「じゃあ、先に帰って風呂と洗濯を済ませといた方がいいだろうな」
　そう言いながら、飄次郎は、倉庫のドアを開け、外に出た。
　そして、足元に落ちているものに気付き、拾い上げる。
「……」
「どうしたんですか？」
　訊きながら、詩織が飄次郎の手元をのぞき込む。
　それは、埋立地には似つかわしくない、まだ真新しい野球帽だった。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

－第五章－

　日が暮れてから、雲の流れが変わり、一転、雨になった。
　冬の雨は冷たいが、春が近いしるしでもある。
「けっこう降るねえ」
　さあさあと窓を叩く水滴をちらりと見て、ぽつん、とそう言いながら、モニターに目を戻す。
　大型、小型、新式、旧式、タイプの違う幾つものディスプレイが、てんでばらばらに様々なデータを表示している。
「明日は晴れるかな？」
　そう言いながら、緑郎は、キャプチャーボードを通して表示させているＴＶ画面のチャンネルを変えた。夕食後の、ちょうど天気予報をやっているくらいの時刻である。
　その時、ドアのチャイムが安っぽい音を立てた。
「……？」
　１Ｋの、お世辞にも広いとは言えない部屋を、床に散乱している雑誌類を踏まないように横切り、ドアの魚眼レンズを覗く。
　そうしてから、緑郎は、ドアを開いた。
　長い髪を雨に濡らした少女が、眼鏡の奥の黒い瞳を、こちらに向けている。
「ランちゃん……」
　その、ほっそりとした肢体が、いつになく弱々しく見える。
「えーと、早く入んなよ。風邪ひいちゃうよ」
　そう言われて、ランは、無言でこくりとうなずき、たたきに上がった。
　ぬれねずみになっているせいでよく分からなかったが、ランは、静かに泣いているようだった。
「……」
　緑郎は、普段の軽薄なくらいにひょうきんな表情を引っ込め、少し考えこんだ。
　緑郎が、狗堂と飄次郎が向かった埋立地の場所をキャッチしたのが、今日の昼過ぎだった。狗堂が盗んだ車の動きを、警察無線などから割り出したのである。
　そしてランは、その場所に一人で行くと言い張ったのだ。
　慌てて止める緑郎を、ランは、借りっぱなしだったスタンガンで脅しまでした。
　結局緑郎は、根負けして、ランを一人で送り出したのだ。
　その前に、万一のことを考えて、この場所の住所と連絡先だけは、教えておいた。
　よほど後を尾行しようかと思ったのだが、ランの感覚――とくに嗅覚は以上に鋭い。緑郎は、断念せざるをえなかった。
　そして、夕方、埋立地に行ってみると、警察が現場検証をしていた。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そこには、昏倒した大学生の男と、その男が所有してたらしいナイフと、そして、死体があったという。
　だが、飄次郎とランの姿は、そこにはなかった。
　そして緑郎は、未整理な気持ちを抱えたまま、とりあえずいくつかある隠れ家の一つに戻ってきたのである。
「……お風呂、入る？」
　いろいろと訊きたい気持ちを抑えて、緑郎が、言う。
　ランは、無言で肯き、あまり広くない脱衣場に入っていった。短い廊下に、濡れた足跡が残る。
「……覗かないでよォ」
　ちら、とこちらを見てランがそう言った時、緑郎は、むしろ救われたような気持ちがした。

「はい、ホットミルク」
　レンジで温めた牛乳を入れたマグカップを、緑郎はランに差し出した。
　湯上りのランは、緑郎のトレーナーを着ている。さすがにぶかぶかで、裾が、膝上まで来ている。
「ありがと……」
　そう言って、ランはマグカップを両手で受け取った。
「飲みやすいようにハチミツ入れといたからねん」
「子供扱いしないでよ」
　むー、と唇を尖らせた後、ランはテーブルにつき、ホットミルクに口をつけた。
　んく、んく、と、細い喉を小さく鳴らしながら、ランがホットミルクを飲み干していく。
「ふー……おいし♪」
「よかった」
　思わず言ったランに、緑郎がにっこりと微笑みかける。
　と、その緑郎の顔を、ランはじっと見つめた。
「……何？」
　年甲斐もなく頬が赤くなるのを感じながら、緑郎が訊く。
「緑郎……あたしのこと、好き？」
「うん」
　緑郎が、子供のように素直に、答える。
「なんだか、真剣みが足りないなア」
「んなこと言われても」
「えっと、じゃあさ……あたしのこと、抱きたい？」
「う……うん」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

先程より少しだけ、緑郎の返事が遅れる。
「ホント？」
「本当だよ」
重ねて訊くランに、緑郎は、いつになく真摯な表情で言った。
「じゃあ……」
ちら、とランは、眼鏡の奥から、緑郎の顔を見つめた。
と、椅子に座ったままのランに、緑郎が近付く。
緑郎は、まるで壊れ物に触れるように優しく、ランの細い肩に両手を置いた。
「じゃあ、どうればいいの？　お姫様」
ランの緊張をほぐすように、緑郎が、いつもの調子でそんなことを言う。
「えっと……まずは、キス、かな……」
「ん」
短く返事をして、緑郎は、ランに顔を寄せた。
その目を閉じると、緑郎は、意外なほど美形に見える。
そんな緑郎にちょっと驚いたランの唇に、緑郎は、唇を重ねた。
座ったままのランに緑郎が覆い被さるような、そんな姿勢のキス。
ランが飲んだばかりのホットミルクの味がする、ほのかに甘いキスだ。
と、緑郎の唇に、差し出されたランの舌が触れた。
ランが、そのあどけない顔に似合わない大胆な舌使いで、緑郎の唇をまさぐる。
しばし面食らった緑郎は、気を取り直したように、ランの舌に舌を絡めた。
「んン……んふ……ン……ラン……」
緑郎の舌の動きを受け止めながら、ランが、小さな声を漏らす。
互いの口内を舌で探るような、濃厚なキス……。
そして、ようやく、二人は唇を離した。
「ランちゃん……こんなキス、どこで覚えたの？」
そう訊く緑郎に、ランは、かっと頬を染めた。
「どこでって……あたし、初めてのキスだよっ」
「あ、そう？　にしては……」
「なによォ」
「エッチなキスだなあ……って、思った」
ランの顔が、ますます赤くなった。
無論のこと、緑郎は、ランが、兄に口唇奉仕を施すことによって、その身体に現れた変化を解消してきたことなど、知らない。
「……エッチな女は、嫌い？」
ランの幼い口元から“おんな”という単語が出てきたことに、緑郎は思わずくすっと笑ってしまった。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして、そんな緑郎にランが抗議する前に、言う。
「そんなことないよ、ランちゃん」
そう言って、半ば強引にランを椅子から立たせ、きゅっ、と抱き締める。
「あ……」
ランは、かすかに身じろぎしたが、すぐに、緑郎の胸にその細い体を預けた。
「オレもけっこうエッチだから、ランちゃんもエッチだと嬉しいな♪」
「もう……」
そう言いながらも、ランは、緑郎の胴に腕を回した。
「緑郎、ホントにあたしのこと好き？」
そして、再び、そう訊く。しかしその声は、どこか甘えるような響きがあった。
「好きー♪」
緑郎が、そう言ってランの体を抱く腕に力を込める。
「緑郎って……ロリコンなの？」
ランが、緑郎の腕の中で顔を上げ、そんなことを訊いた。
「う、うーん。自分じゃあ、そういうつもりはないんだけどね〜」
一回りは年の違う少女を抱き締めながら、緑郎は、困ったような声で言った。
「たまたま好きになったコが、ちょっとばかり年が離れてた、ってだけなんだけど」
「そう……なんだ……」
「うん」
「なんだか……ちょっと悔しいくらいに、嬉しくなっちゃった」
そう言って、ランは、本当に嬉しそうな顔で微笑んだ。

照明を絞った部屋の中で、ランは、緑郎のトレーナーを脱ぎ捨て、全裸になった。
薄暗い闇の中で、白いランの体は、ほのかに光を放っているように見える。
その裸体を形作る曲線はなめらかで、少女らしい控え目な凹凸を描いていた。
薄い肉付きのほっそりとしたその体は、どこか妖精を思わせる。
「キレイだよ、ランちゃん……」
そう言って、すでに服を脱いでいた緑郎が、ランの体を抱き締めた。
そして、右手でランの頭を優しく撫で、その腰にまで届きそうな癖のない黒髪を、指ですくようにする。
「緑郎……」
ランが、顔を上げた。その顔には、未だ眼鏡をかけている。
「ランちゃん、メガネは、そのまま？」
「うん……。だって、外すと緑郎のこと、よく見えないもん」
「ん、分かった」
そう言って、緑郎は、ランの前髪をかきあげ、その額にちゅっ、とキスをした。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

そして、左右の頬や耳たぶに、聞いている方が恥ずかしくなるような、ちゅっ、ちゅっ、という音をたてながら、キスの雨を降らす。
「あ……ン、うん……」
ランが、くすぐったそうに、その肩をすくめる。
そんなランの小さな唇に、緑郎は唇を重ねた。
再び、とろけるようなキス。
そんなキスをしながら、緑郎は、ランの左の胸に、右手を重ねた。
「んっ……！」
唇をキスで塞がれた状態で、ランが、小さく声をあげた。
しかし、ランはかすかに体をよじっただけで、本格的に抵抗する様子は見せない。
緑郎は、未だ発達途上のランの胸に当てた手をゆるゆると動かした。
乳房と呼ぶのがためらわれるような、ささやかな胸の頂点で、ピンク色の乳首が、徐々に固くなっていく。
緑郎は、唇を離し、ランの前で膝をついた。
そして、右の乳首を、口に含む。
「あン……」
乳首をちろちろと舌で愛撫され、ランは、ぶるっ、と体を震わせた。
そんなランの両方の乳首を、緑郎は、交互に口で責める。
「あ……はァン……」
「くすぐったい？」
「ん、ちょっと……でも……」
「でも、なに？」
「気持ちいい……」
そう告白するランに、緑郎は笑いかけ、ちゅばっ、ちゅばっ、と乳首を唇で軽く吸った。
緑郎の唾液に濡れたランの乳首が、ぷくん、と小生意気に勃起する。
緑郎は、その小粒の突起を口の中で転がし、桜色の乳輪をくるくると舌で舐め回した。
ランは、腰の両脇でぎゅっと小さな拳を握り、んっ、んっ、と喘ぎを噛み殺している。
「声、出してもだいじょぶだよ、ランちゃん」
「で、でも、お隣に聞かれちゃう……」
ランが、ぽおっと目元を染めながらも、そう言う。
「へーきへーき。実はこの部屋、大家さんに内緒で防音に改造してるんだ」
緑郎が、そんなことを言って、ランの乳首に、軽く歯を当てた。
「ひゃうッ！」
ランは、思わず声をあげ、そして、両手で口元を覆った。
「い、いじわるぅ……」
そして、潤んだ瞳で、緑郎の顔を見つめる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

緑郎は、そんなランの体を、ゆっくりと布団の上に横たえた。
「あぁ……」
溜息のような声を漏らすランの体を、緑郎が、横抱きにする。
そして、思春期を迎えたばかりの少女特有の細い脚の間に、そっと、右手を滑りこませた。
無毛の恥丘を、手の平で包むようにする。
「あっ……どうしよう……すっごいドキドキする……」
ランは、そう言いながら、強張らせた。
「だいじょうぶ、リラックスして……」
そう言いながら、緑郎が、ランの唇に、ついばむようなキスをする。
「う、うん……でも……」
「なに？」
「初めてって……痛いんでしょ？」
そう訊かれて、緑郎は、困ったような顔になった。
「らしいね。……女のコじゃないから、分からないけど」
「男の人って、最初から気持ちいいの？」
「うん」
「それって、なんか不公平……」
「ごめんね」
自分が悪いわけでもないのに、緑郎はそう謝って、ちゅっ、ちゅっ、とバードキスを繰り返した。
ランの体から、次第に、余計な力が抜けていく。
「あ、あのね、緑郎」
キスの合間に、ランが、口を開いて言った。
「なに？」
「あの……もし、あたしが、痛くて泣いたりしても……とちゅうでやめないでね」
そんなランの健気なセリフに、緑郎は、キスで応えた。
「ラン……んむ……ふぅん……ンっ……」
緑郎の頭を、ランが、細い両腕で抱き締める。
緑郎が、ぷっくりとした恥丘からさらに奥へ、指を進ませた。
幼い、まだ縦線一本のシンプルなスリットに、緑郎の指先が触れる。
「んく……っ」
キスで塞がれた口で、ランが、くぐもった声をあげた。
緑郎が、触れるか触れないかという優しいタッチで、ランの割れ目をまさぐる。
愛液が、透明な珠となって、スリットからにじみ出た。
その愛液を塗りこむように、緑郎の指が、ぬるぬるとうごめく。

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「んは……あ……あァ……あぁン……」
　口を開け、抑えきれずに喘ぐランの首筋に、緑郎が唇を這わせる。
「やぁン……緑郎の指……すっごくエッチいよォ……」
「エッチにしないと、気持ちよくなれないの」
　緑郎が、子供に教え諭すような口調で、言う。
「だから、うんとエッチなことしてあげるね」
　そう言って、膨らみかけの胸に頬ずりをしてから、乳首を、口に含む。
　ランのスリットからは、次々と愛液が溢れ、緑郎の指先を濡らしていった。
　緑郎は、その部分をほぐすように、ますます熱心に指先を動かす。
　ランのその部分は、次第にほころび、柔らかな内部を次第に露わにしていった。
　その、ささやかな肉の谷間に、緑郎が、中指を滑りこませる。
「ひゃうん！」
　ランの細い体が、軽くのけぞる。
　その部分の、ぷにゅぷにゅとした感触を指先に感じながら、緑郎は、あくまで優しく愛撫を続けた。
　そうしながらも、乳首や鎖骨のくぼみに舌を這わせ、幼い肉体に眠る性感帯を探っていく。
「あ……ンあぁ……あ……ああアっ……！」
　することには慣れていても、されることには慣れていないランは、その太めの眉を切なげにたわめながら、恥ずかしそうに声を漏らしてしまう。
「気持ちいいでしょ？　ランちゃん」
　そう尋ねる緑郎に、ランは、こくこくと肯いた。
「もっともっと気持ちよくしてあげるね……」
　そう言いながら、緑郎が、ゆっくりと頭を移動させた。
　そして、おへそや恥丘にキスを繰り返しながら、最も秘めやかな部分に到達させる。
「ふあ……」
　ランは、自分の股間に、ぼんやりと目をやった。
「や……そこ、きたな……ひあッ！」
　抗議の声が、悲鳴で途切れる。
　緑郎の舌が、残酷に、ランのクレヴァスをえぐったのだ。
「や……こ、こんなの……あひ……ひゃうぅン！」
　その幼い体では受け止めきれない鋭い快感に、ランは、ぴくぴくと体を痙攣させる。
　緑郎は、ランの小さなヒップを両手で捧げ持つようにして固定し、口唇愛撫を続けた。
　溢れ出る愛液を舐め取るように、舌で靡粘膜の間を舐め上げ、膣口周辺を舐めまわす。
「ろ、緑郎……ヘンだよ……ヘンになるよォ……」
　そう言いながら、ランは、緑郎の頭を両手で押さえた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そのまま、押しのけることも、押しつけることもできず、ただいたずらに緑郎の柔らかな髪を乱す。
　緑郎は、わずかに酸味のある独特の味を舌に感じながら、ますます熱心にクンニリングスを没頭した。
「ンわぁ！」
　緑郎の舌が、包皮の上からクリトリスに触れたとき、ランは、一際高い声をあげてしまった。
　緑郎の舌先が、くにくにとその部分を嬲り、莢の上から硬くした舌先で圧迫する。
「ンあ……あぁ……あああああッ！」
　怖くなるくらいの快感に、ランは、そのしなやかな体をシーツの上でうねらせた。メガネが、その動きで大きくずれる。
　緑郎が、舌と唇でその快楽のスイッチを愛撫しながら、指先で小さな膣口をまさぐった。
　あまりにも小さなその肉の入り口を、これからの侵入が少しでも楽になるように、入念にほぐそうとする。
　その部分をやさしくこじ開けられる感覚も、ランの中では、クリトリスへの刺激と混じり合い、けして不快なものではなくなっていた。
　緑郎が、探るように、指を挿入した。きついが、思ったほどの抵抗は感じない。
　緑郎は、ランのクレヴァスから口を離し、そして、上体を起こした。
「はぁ……はぁ……はぁ……はぁ……」
　乱れた呼吸を整えようとしているランに、緑郎は、覆い被さるようにする。
「ランちゃん……ごめん、もうちょっと足、開いて……」
「う……うん……」
　緑郎に言われるまま、ランは、まるで仰向けのカエルのような、屈辱的な姿勢になる。
　腰を進めた緑郎のペニスの先端が、ランのクレヴァスに触れた。
「うわ……」
　亀頭部の、意外なほどの熱さに、ランが怯えたような声をあげる。
　緑郎は、ずっこけたままのランのメガネを、直してやった。
「あ……」
　緑郎の顔を視界におさめたためか、ランが、安心したような顔になる。
「緑郎……や、やさしく、してね……」
「うん」
　そう言って、緑郎は、ゆっくり、ゆっくり、腰を進めていった。
　まだ未成熟な少女の膣口に、熱くたぎるペニスを挿入させていく。
「ん……うっ……」
　息苦しさを感じているのか、ランが、小さくうめくような声をあげる。
「だいじょうぶ？」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「うん……へいき……べつに、いたくないよ……」
「じゃあ、もうちょっと入れるね」
　そう言って、緑郎は、慎重に侵入を再開した。
　探るようにのろのろと、剛直を差し入れていく。
　それなりのサイズの緑郎のペニスを受け入れるのは、やはりきついのだろう。ランは、目をぎゅっと閉じ、眉をたわめている。
　このまま一気に挿入し、無茶苦茶に腰を動かしたい衝動に必死に耐えながら、緑郎は、挿入を続けていった。
　みっちりとした膣内の感触が、上下左右から緑郎の亀頭部分を包みこむ。
「あく……！」
　とうとう緑郎のペニスが、純潔の証しに触れたとき、ランは小さく悲鳴をあげた。
「ラ、ランちゃん？」
「――や、やめちゃ、だめッ！」
　思わず腰を引きそうになった緑郎に、ランは、思いきりしがみついた。
「あ、ああ、あ……っ！」
　理性と欲望の葛藤に、思わず声をあげながらも、緑郎は、そのペニスで、ランの処女膜を貫いていく。
「……ッ！」
　ランは、それ以上、悲鳴をあげなかった。
　緑郎のペニスが、ランの一番奥にまで、到達した。
「はあぁ……」
　ランが、どこか満足げな溜息をつく。
「ラ、ランちゃん……だいじょうぶ……？」
　入れているだけでも感じる強烈な快感に声をやや上ずらせながらも、緑郎が訊く。
「んふ……へいき……ン……し、しんぱいして、ソンしちゃったよ……」
　そう言って、ランは、健気にも微笑んだ。
　その目尻には、しかし、涙がにじんでいる。
「緑郎は、気持ちいいの？」
「え？　……う、うん……すごく気持ちいいよ……」
　緑郎は、思わず正直に答えてしまう。
「やっぱり、ふこうへいだなぁ……」
「ごめん……」
「でも、いいよ。緑郎が気持ちいいなら……嬉しいから……」
「ランちゃん……」
　緑郎は、ランの体を、きゅっと抱き締めた。
「好きだよ、ランちゃん……」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

この少女の体温を両腕に感じているだけで、そのまま射精してしまいそうだ。
「緑郎……」
耳元に、ランの声と、息遣いを感じる。
緑郎は、とうとうがまんができなくなって、腰を動かし始めていた。
「あ……あう……ン……くぅ……っ」
初めて感じる抽送の感覚に、ランが声をあげる。
緑郎は、できるだけランの負担を減らそうと、浅い場所で、小刻みにピストンを繰り返した。
雁首に、血と愛液で濡れた肉襞がぬるぬると絡みつく。
「ンあ……ろ、緑郎……っ」
ランが、緑郎の首にかじりつくように腕を回しながら、言った。
「ご、ごめん、ランちゃん……オレ、腰が止まんない……」
緑郎が、我ながら情け無いと思うような声で、そんなことを言う。
「ち、ちがうの……ンンッ……な、なんだか……それ……」
「ランちゃん？」
「なんか、あつくて……しびれて……ヘンなの……ヘンになるよお……」
頼りない声で、快感未満のその感覚を、ランが訴えてくる。
緑郎は、荒く息をつきながら、その右手を結合部に伸ばした。
「ンあああああッ！」
そして、快感で痛みを和らげようとするように、クリトリスを指先でくにくにと愛撫する。
「ンあ……そこ、いじったら……あン……あ、ンあああああッ！」
フードの上から敏感な突起を嬲られ、ランの声が、次第に甘く濡れていった。
「それ……イイ……イイの……ろ、緑郎……緑郎……っ！」
「ランちゃん……ランちゃん……」
互いに互いを呼ぶ声が、ほの暗い部屋の中で、混じり合う。
左腕でランの体を抱き、右手でその肉の真珠を愛撫しながら、緑郎は抽送を続けた。
絡みつくような熱い膣肉の感触に、たぎるペニスの根元で、射精欲求が高まっていく。
と、緑郎の指が、偶然、クリトリスを保護していた包皮を剥いてしまった。
「ひ……ッ！」
敏感過ぎるほど敏感なその器官に、緑郎の体が触れる。
きゅううううん、と痛いほどにランの秘所が緑郎のペニスを締めつけた。
「うあ……ッ！」
その瞬間、緑郎は、自分でも驚くほど大量の精を、ランの体内に放っていた。
「あ、あ、あああああああああああああああああああああああッ！」
びゅるるるるッ！　自分の中で迸るスペルマの温度に、ランが悲鳴のような声をあげる。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

緑郎の射精は、一度ではおさまらない。
びゅくん、びゅくん、と何度も律動しながら、熱いスペルマを、幼い少女の膣内へ注ぎ込んでいく。
二人の体が、しばらく、動きを止める。
そして、ほぼ同時に、ぐったりと弛緩した。
力を失った緑郎のペニスが、ぬるん、とランの膣圧に押し出される。
そして、血の混じったピンク色の精液が、こぽこぽと膣口から溢れ出て、シーツを汚していった。

「ひゃう……」
ウェットティッシュで股間をぬぐわれながて、ランは、ぴくん、と可愛く体を震わせた。
緑郎が、あぐらをかきつつ、足を伸ばして座るランを後から抱くような格好である。
「……もっかい、お風呂入った方がいいかな？」
ランの顔を後からのぞきこみながら、緑郎が言う。
「……もうちょっと、このままでいさせて」
そう言って、ランは、緑郎の体にもたれかかった。
「あのね、緑郎」
「なに？」
しばらくして、ぽつん、とつぶやくように言ったランに、緑郎が答える。
「あたしね……お兄ちゃんが好きだったの……」
「飄次郎ちゃんが？」
「うん」
伸ばした自分の足の先を見つめながら、ランが言う。
「お兄ちゃんを“なおす”のは、あたしの役目だったけど……そういうことを抜きにしても、あたし、お兄ちゃんが好きだった……」
“なおす”というのがどういう意味なのか分からぬまま、緑郎は、無言でランの言葉を聞き続けた。
「でも……お兄ちゃんは、あたしの知らないところで、相手を見つけてた……」
「飄次郎ちゃんが、ねえ……」
いかにも堅物そうな飄次郎の顔を思い浮かべながら、緑郎が言う。
「その人が、お兄ちゃんを“なおす”とこ、見ちゃったんだけど……その人、血族でもないくせに、すごく……すごく、お似合いだった」
「……」
『“なおす”ってことは、誰でもできることじゃないの……男衆の血を鎮めることができるには、特別な力なんだって、長が言ってたわ……男衆の血の声を聞けなきゃダメなんだって……なのに、あの人は……あたし、負けたなあ、って思っちゃった」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

すでに、ランの話は、緑郎の理解の外に行ってしまっている。
しかし、緑郎は聞き返すことをせず、そっと、ランの体を抱き締めた。
話の意味は分からなくとも、その腕を通して、哀しみだけは、伝わってくる。
「あの人は……巫女なんだわ……自分で気付いてないんだろうけど……血とか、鬼とか、魂の声を聞くことができる……ね」
「……」
「でも、あたしが負けたって思ったのは、そのせいじゃないの。あの人のほうが、ずっとずっと、お兄ちゃんのことを好きで……その上、お兄ちゃんも、あのひとのこと好きで……」
ランの声が、涙で濡れていく。
「村もなくなっちゃって……お兄ちゃんにも好きな人ができて……あたし、どこにも行くとこがなくなっちゃって……」
言いながら、ランは、緑郎に振り返った。
「でも、緑郎なら、あたしに優しくしてくれると思って……だから、あたし……ごめんなさい……ごめんなさい……」
ランは、緑郎の胸にすがりつき、まるで小さな子供のようにぽろぽろと涙をこぼした。
「なんであやまるの？」
緑郎が、ランの長い髪を撫でながら、訊く。
「だ、だって……」
「オレは、代わりでも二番目でも緊急避難先でも、ぜんぜん構わないんだよ、お姫サマ」
そう言って、緑郎は、両手でランのメガネを外した。
「あ……」
とまどったような声をあげるランの顔に、緑郎が顔を寄せる。
「これだけ近付けば、メガネ無くても見えるでしょ？」
そう言う緑郎に、ランは、肯いた。
こつん、と額と額がぶつかる。
「……んふっ」
たまらず、ランは吹き出した。
緑郎も、にっこりと笑いかける。
そして二人は、互いの体に腕を回し、ゆっくりと口付けた。

翌日、昼になって、緑郎の携帯電話に飄次郎から連絡が入った。
そして三人は、都心の喫茶店で合流したのである。
「ほれ、落し物」

Neon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

　そう言って飄次郎は、ランに野球帽を手渡した。その顔は、どこかバツが悪そうだ。
「お楽しみだったみたいね、お兄ちゃん」
　ランが、にやにや笑いを浮かべながら、言う。
「あたしに気がつかないくらいにさ」
「声をかけてくれれば……」
「そんなことできるわけないでしょ」
　そう言って、ランは、涼しい顔で目の前のココアをすすった。
「で……あの人は、どうしたの？」
「あの人？」
　ランの問いに、飄次郎が訊き返す。
「だからあの、ショートカットの人」
「別に……今は家にいる」
「ふーん。さらってくればよかったのに」
「無茶苦茶言うな」
　飄次郎は、苦い顔で言った。
「でさあ、これから、飄次郎ちゃんはどーすんの？」
　緑郎が、飄次郎に助け舟を出すように訊く。
「まずは、村に何が起こったのか、知る必要がある」
　飄次郎が、コーヒーカップの中のエスプレッソを睨みながら、言った。
「全ては、それからだ」
「で、その調査については、引き続きオレに任せてくれるわけ？」
「他にあてが無い」
　飄次郎の言葉に、緑郎は、ひょい、と肩をすくめた。
「ま、オレほど優秀な情報屋さんは、そうおいそれとは見つかんないだろーからねえ。でも……」
「何だ？」
「お金、あるの？」
　飄次郎は、虚を突かれたような顔になった。
「無いんでしょ？　故郷からの送金がなくなっちゃうんだから」
「……」
「やれやれ、飄次郎ちゃんてば、お坊ちゃんだねえ」
　言いながら、緑郎は、その陽気そうな顔に、悪戯っぽい笑みを浮かべた。
「でもね、お金が無ければ稼げばいいの。それが世間というもんだよん」
「それは……そうだな」
　そう言いつつも、飄次郎は、話の成り行きにやや戸惑っている様子だ。
「でもまさか、ファミレス店員とかやるガラじゃないよねえ」

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「大きなお世話だ」
「そんなこと言っていいのかなあ、飄次郎ちゃん」
　緑郎は、ここで言葉を切って、焦らすように目の前のミルクティーを飲んだ。
　ランは、すでにこれから緑郎が言うことを聞いているのか、笑いをこらえているような顔だ。
「何が言いたいんだ？」
　根負けしたように言う飄次郎に、緑郎は、いつもの軽薄な顔を向ける。
「だからさ……オレが、仕事の世話してあげようか、ってことだよん」
　そう言ってから、緑郎は、ランと意味ありげに視線を交わした。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

－終章－

少女は、草むらに仰向けに寝て、ただ、空を見ていた。
お気に入りの河原の土手。遠くから、少年野球チームの歓声が聞こえてくる。
週末の昼。暖かな春風が頬をなぶる感触が、気持ちいい。
彼と別れて、一ヶ月あまり。
自分が、確かに変わったことを、少女は自覚していた。
あの辛い夏以来、ぎくしゃくしていた母親との関係も、元に戻りつつある。
どこか疎遠になっていた友だちとも、心の底から笑い合うことができるようになった。
それでも、一人になると、心の中に、ぽっかりと穴が開いてしまったような気持ちになる。
たった三日を一緒に過ごしただけの、あの不思議な男……。
（飄次郎さん……）
鋭い目つきの、しかしどこか子供っぽさを残した、あの男。
優しい――狼男。
（飄次郎さん……どうしてますか……？）
（あたしは……まだまだ、甘えんぼです……）
（でも……でも……）
（あなたの思い出に甘えるくらいなら、許してくれますよね……）
（それとも、また、お説教されちゃうかな……）
（それでも……いいけど……）
ゆっくりと流れる雲を見ながら、そう思っていたとき――
「詩織、こんなとこにいたのか」
夢にまで現れたその声を聞き、詩織は、がばっ、と体を起こした。
そこに、飄次郎がいた。
「あちこち探したぜ」
そう言いながら、飄次郎が、土手の斜面を降りてくる。
「いろいろあって、遅くなった」
「いろいろ……？」
「ああ。この街に、まだやっかいな連中が残っててな。俺やお前にちょっかいを出せないように、ちょっと痛めつけといた」
にっ、と飄次郎は、片頬だけで笑った。
「この街での仕事も、ようやく終わりさ」
「じゃあ……また、どっか行っちゃうんですか？」
そう尋ねる詩織の肩に、飄次郎は、両手を置いた。

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw

「俺、東京で仕事してるんだ」
　そして、はにかんだような口調で、飄次郎は言った。
「探偵――って言うか、情報屋って言うか、なんだかよく分かんない奴と一緒にな。助手だか、相棒だか、用心棒だか、そんな感じの仕事を」
「それじゃあ……」
「実は……最近、けっこう近くに、部屋を借りたんだ」
　ますます照れた様子で、飄次郎が言う。
「だからその……俺、これからずっと……」
　みなまで言わせず、詩織は、飄次郎に抱きついていた。
　もう逃すまい、とするかのように、ぎゅっと腕に力を込め、そして、飄次郎の顔を見上げる。
　飄次郎の顔が、涙でにじんだ。
「人が、見てるぞ」
　そう言う飄次郎に、詩織が、聞き分けの無い子供のようにかぶりをふる。
　飄次郎は、ふっと微笑み――
　そして、詩織の柔らかな唇に、優しく口付けたのだった。

終

Zeon PDF Driver Trial
www.zeon.com.tw